

歴史認識を深める学習態度の形成とその指導

[1]

目 次

はじめに	1
I 研究の構想	1
1 態度について	1
2 学習態度について	3
3 歴史認識と学習態度について	3
4 研究の年次計画	4
II 研究目的	4
III 研究計画	4
1 ことばによる刺激と反応を媒介する意味について	4
2 歴史学習における媒介過程	5
3 研究仮説	5
IV 研究方法	6
1 対象とした学校，学級	6
2 研究した歴史的概念	6
3 調査方法	6
4 学習指導	9
V 研究内容	10
1 指導の概要	10
2 歴史事象に対する理解傾向と学習態度	13
(1) 関係づけようとする歴史事象からみた理解傾向と学習態度	13
(2) 関係があると判断した理由からみた思考傾向	19
(3) 上，中，下位群の思考傾向の相違	21
3 歴史事象に対するイメージ形成の傾向 —感じ方の問題—	27
(1) 自由民権運動	27
(2) 日露戦争	31
4 歴史事象に対する受けとめ方，見方の傾向	36
(1) 自由民権運動	36
(2) 日露戦争	42
5 結果の要約	48
むすび	49

歴史認識を深める学習態度の形成とその指導

はじめに

昨年度まで「児童生徒の歴史理解とその指導」について三か年の継続研究を実施し、一応終了したのであるが今年度から次のような理由で表記の主題を取り上げて研究することにした。

すなわち、われわれが児童生徒の歴史認識を深めようとして指導する際、その過程や結果を通してみられることは児童生徒の認識過程における思考の様態にはいろいろな差があることである。このことは特に学習能力と関係して成績の上下において著しい相違がみられるし、また学習や生活経験を通して形成された社会事象に対する考え方や見方が、その社会事象を学習する際における思考のしかたに大きく影響していることはよくみられることである。したがって、児童生徒の実態に即したきめの細かい指導をしていくには思考傾向をより内面的な点から考察してみる必要性を感じたからである。

もう一つの理由は、児童生徒の学力向上という観点からみた場合、学習対象となる社会事象に対してより深い考え方、見方、感じ方で学習する心的傾向が形成されることが必要であると考えからである。社会認識が深まるということは単に知識を獲得することだけでなく、社会事象に対し、より深い考え方や見方を身につけることである。そして、それがまた学習の場面において重要な学習態度としてはたらくことはいままでもない。以上のような理由から、まだ未開拓であり、多くの難解な問題を含む、この問題に取り組んでみたわけである。また、この問題は全国教育研究所連盟でも三か年の継続研究として「学習態度の形成に関する基礎的研究」という主題で共同研究を開始することになり、当研究所もこれに参加して研究を進めているわけである。

I 研究の構想

1 態度について

学習態度と普通というとき、学習場面におけるまじめな態度、協力性、持久性などをさす場合が多いが、ここでは、そのように限定しては考えない。それは、態度というものが現在の研究段階では次のようにいわれているからである。^[1]

o 態度の規定と態度形成の条件 — オルポート (Allport) の理論 —

オルポートは、態度の基本的特性を「反応のための準備態勢」として、さらに次のように規定している。「態度は経験を通じて体制化された心的ないし神経的(生理的)な準備態勢であって、個体に関連をもつ限りのすべての対象ないし状況に関して、これらに対する個体の反応を方向づけ、あるいは力動的に変化させるような影響力をもつものである。」とし、態度形成の条件としては次の四つをあげている。① 経験の累積による個々の特殊な反応の結合、② 劇的な体験に基づく心的構造の急激かつ持続的な体制化、③ 成長発達に伴う未分化でばくぜんとした態度から分化された複雑な態度への変化、④ 他者の模倣に基づく既成の態度の移入。

o 態度の特性 — シェリフ (Sherif) とキャントリル (Cantril) の理論 —

シェリフとキャントリルは、オルポートの理論を受け継ぎ、これを発展させて、態度を次のように規

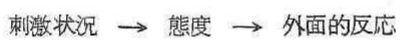
定している「対象または状況に対する個体の選択的かつ固有の反応を規定する多少とも持続的な反応準備態勢」として、これを他の反応準備態勢と区別するため次の五つの基準をあげている。

- ① 態度は主体 — 客体の関係において成り立つものである。
- ② 態度は個体が特定の対象に対して示す先天的な反応準備体制でなく、学習の結果として生ずる後天的なものである。
- ③ 態度は感情的なあるいは価値的な性質を帯びている。態度は食物などに対しては本能的な起源をもっているが、一面社会的な価値とか規範に関係して形成されるので感情的、価値的な性質になっている。
- ④ 態度は持続的である。しかし、それは新しい事実やできごとによって変化する可能性を有する。
- ⑤ 態度は一般に広い範囲の多様な刺激に関係づけられる。したがって態度形成の当初には表だっていなかった刺激が後になって強い関係をもつようになることもしばしばありうる。

o S-R理論による態度の規定 — ドップ (Doob) の理論 —

ドップは刺激—反応のS-R理論に基づいて態度を解釈し次のように述べている。

- ① 態度は直接観察される外面的反応でなく、各種の状況における多様な行動を通じて推定される内面的反応である。
- ② 態度は外面的反応に対して媒介的に作用するものである。刺激状況と外面的反応との間にあって媒介的に作用するもので、その結合関係は次のような図式で示される。

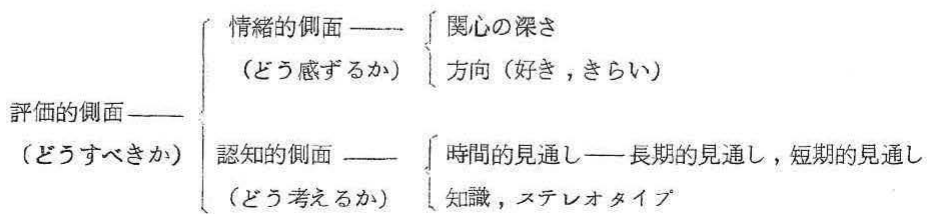


- ③ 態度は単に内部反応にとどまらず、それ自体がひとつの内部刺激として作用する。態度的反応はそれ自体が個体の中に新しい緊張をもたらし、その解消を要求するものなので他の反応の動因となる。

以上は主要な態度の理論に関する要約であるが、いずれも共通していることは「態度は行動そのものではなく、行動への準備、傾向をその本質」とし、その行動は単に動作（外面的行動）だけでなく言語表現、思考、感情などの次元を異にする層を含み、どの次元の行動を問題にするかによって態度の規定やとらえ方が異なってくるといわれる。そして、それらを最も包括的に定義したものとして前記のオルポートの規定が引用されている場合が多い。

o 態度の構造について

態度の構造については大別して二つあり、一つはある態度と他の態度との間にどのような関係があり、態度相互間にどのような階層的関係があるかなどをみようとするものである。もう一つは態度を構成する内部のいくつかの側面、要素に分けて、その関係をみようとするものである。本年の研究は後者に関係するので、後者について少しふれておきたい。竹内都郎は、態度内の構造として評価的側面と認知的側面、情緒的側面の三つをあげ、その関係を次のように図式化している。



して、合理的な態度には正確な事実的知識と情緒的には中立的な評価的態度が必要であると述べてお
 2) 対象をどう認識してきたかによって態度は異なり、個人の個性的なものの方が形成されることが
 が強調されている。

2 学習態度について

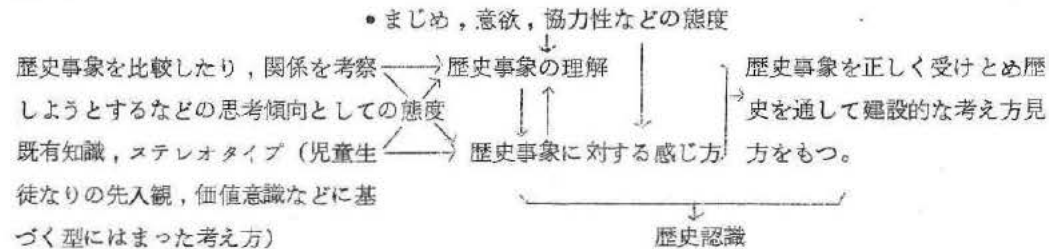
学習態度も態度の中のひとつとして今まで述べたような観点からいうなら「学習場面においてある行
 の傾向を示すような反応の準備態勢」ということができると思うので、一応現段階ではこのように規
 定しておく。しかし、この行動とは思考、感情、など次元を異にした層を含むことは前に述べた通りで
 である。橋本重治は教科の目標とする学習態度には趣を異にした態度があるとし、その一つは社会科にお
 ける社会的態度（社会事象に対する価値観的、思想的態度）や理科における科学的態度などをあげ、第
 二に学習における協力的態度、責任感、研究心、まじめさ、持久性、集中性というようななどの教科にも
 通する学習態度をあげている。(3)そこで社会科の場合は学習対象が社会事象であるのでこれをさらに次
 ように分析できるであろう。

- ・学習の対象となる社会事象に対する態度……その事象に対する認識、情緒的側面に基づく評価
- ・その社会事象を学習する際に、他の事象と比較したり関係づけて考察しようとするような思考傾向
 としての態度
- ・学習にまじめに意欲的に参加してゆく態度

そして、これらは非常に密接にからみ合っているわけであるが主として思考傾向としての態度を中心
 として、それとの関係で社会的態度や意欲の問題を考察していく予定である。また全国教育研究所連盟
 も学習態度を思考の形式的側面からとらえようとしているわけである。

3 歴史認識と学習態度について

昨年度は歴史認識が深まるということを経験的知識から歴史的事象についての事実の認識から歴史的意味のは握という
 過程で考察し、それを刺激—感覚—知覚—認知の過程として分析した。そこで、この知覚から認
 知の過程について社会心理学では、さらに分析し、この過程には省略し、補足し、構成する、あるいは
 折し、どこか強調し解釈する(5)はたらきがあり、そのはたらきは、その人のもつ価値意識やステレオ
 タイプ（型にはまった考え方をする傾向）情緒などを含んだ態度によるもので、そのような意味で態度
 経験の意味を決定する(6)といわれている。したがって態度は認識に左右されるとともに認識にも影響
 与えているわけである。そこで前記の態度の構造により歴史認識との関係については次のように考え
 れよう。



学習態度を厳密に分析し規定するという事は非常に難解な問題であり、今後さらに視点をしばって

分析をしてゆかなければならない作業である。本年は第一年目であるので包括的な分析をした。

4 研究の年次計画

この研究は前にも述べたごとく三か年の継続研究である。しかも研究としては非常に未開拓の分野であり、かなりの準備期間を必要とする研究問題と云ってよかろう。したがって共同研究も第一年次は各研究所の自由な予備的研究の段階としたのであるが一応現段階では次のような研究の年次計画で進む予定でいる。

- 第一年次 態度についての理論研究と歴史認識を深める学習態度形成上の問題点を握するための予備的事例的研究
- 第二年次 第一年次には握された問題点を中心に学習態度を分析するとともに調査方法を修正改善し再調査の実施と態度形成のための実験授業
- 第三年次 第二年次の研究成果に基づき、学習態度の調査方法の改善実施と態度形成の実験授業の実施、その理論化

そこで本年は前述の歴史認識と学習態度の関係の分析に基づき特定の歴史事象に対する理解傾向、感じ方、学習結果としての歴史事象に対する見方やその受けとめ方の予備調査を実施し、その結果の考察を通して、歴史事象に対する認識を深める学習態度形成上の問題点を握しようとした。

II 研究目的

中学校2年生の歴史認識における考え方、感じ方の様態および学習結果としての歴史の受けとめ方、見方の様態を学習指導との関係のもとで考察し歴史認識を深める学習態度形成上の問題点を握する。

III 研究計画

本年は、前述のごとく理解傾向、感じ方の傾向、受けとめ方、見方の傾向を通して問題点を握しようと考えたのであるが、その実施にあたっては情報を受け入れ理解し、イメージを形成する過程における態度をとらえるために次のような考え方をもった。

1 ことばによる刺激と反応を媒介する意味について

われわれは教授 \leftrightarrow 学習の過程を刺激、反応の過程として考えることができる。教師の指示、助言、発問、説明などの刺激によって児童生徒は過去の経験によって形成された記憶体制に基づき表象し思考し、イメージを形成したり、感情的に反応するからである。しかし、この過程をさらに考察するならば次のような特色がみられる。

- ① 児童生徒の受ける刺激は事象そのものではなく、ことばという記号による場合が多いこと。
- ② それによって生ずる反応にも、ことばの指し示す事象、そのものに関する表象とそれに伴う価値意識や情緒的なものを含んだ解釈された層での反応があること。
- ③ そして、その反応は実際の事物事象に接した場合の反応に部分的にひとしいものがあること。
たとえば、梅干ということばの刺激を受けたとき、すっぱい感じがして唾液がわいてくるということは梅干を食べた経験に基づき、その色、形状、味などを想起するが、特にその味が記号の刺激によ

て短絡的に内部刺激を起こし、唾液がでるといふ現象を引き起こすといえる。この場合短絡的に内部刺激によって起こされる反応は実際の行動の一部であるが故に、オスグットはこの過程を代理(表)的媒介過程⁽⁷⁾としている。ところが刺激として与えられることばによっては児童生徒が直接事象に接していないものがある。この場合は過去に聞いたり、絵を見たりした既有経験によって反応するわけで、それが刺激の記号に対する意味となって内部刺激を起こすといえよう。このような点から

- ④ 刺激と反応を媒介しているものは意味であり、その意味は個人の経験、知識、価値意識、感情などによって相違する場合もあるし、共通的な傾向を示す場合もあろう。といえる。

2 歴史学習における媒介過程

われわれは歴史事象に直接接することはできない。したがって刺激と反応を媒介する意味もまた一つの記号であるといふことができる。たとえば秀吉という刺激により、関白、太閤、大阪城、など一連の記号が想起され、それが内部刺激となって反応を起こすといえよう。そこで歴史事象を示すことば(歴史的概念)の刺激を与えた場合、次のような二つの反応を想定することができよう。

- ① どういう歴史事象(これも一つの記号である)を想起するかという反応
- ② 媒介過程により解釈された次元での反応、

そして、①、②ともに学習前でも既有知識や生活経験、あるいは概念を示すことばの意味などから反応することが可能であり、その考察によって生徒がどのような態度で考え、感じようとしているか考察することが可能であり、学習を通しての変化を考察することにより、生徒が指導の刺激をどのような態度で認識し、感じようとしているか考察することが可能であると考えた。

5 研究仮説

生徒が、絶対視しやすい歴史的概念や、現在の価値意識によってとらえやすい歴史的概念を選び、それを示すことばの刺激により、次のような点から考察を進め学習態度形成上の問題点を把握しようと考えた。

- ① 学習前、過程、後において学習内容である歴史的概念を刺激語として与え、その概念に含まれる原因、経過、結果、影響などの歴史事象をどのように関係づけようとするか、その傾向を下記の点から検討することによって歴史事象に対する理解の傾向とその背後にある学習態度の問題点を把握できるのではないかと考えた。

- ア. 学習前において関係づけようとする者の多い歴史事象
- イ. 学習を通して関係づけようとする者が多くなる歴史事象と少ない歴史事象
- ウ. どのような理由で関係づけようとするか。
- エ. 以上の点について学業成績により上位群、中位群、下位群と分けた場合の相違

- ② 学習前過程後において歴史事象をどのように解釈し、どのようなイメージを形成したかを下記の点から検討することによって、生徒が歴史事象を解釈し、感じようとする意識や指導上の問題点を把握できるのではないかと考えた。

- ア. 学習前の傾向と学習後の変化
- イ. 強く感じた理由

ウ．上，中，下位群に分けた場合の相違

- ③ 学習の結果，その歴史事象に対して，どのような考え方をもつに至ったかの意見調査を実施し，その結果を検討することにより，歴史をどのように受けとめているか問題点を把握できるのではないかと考えた。

Ⅳ 研究方法

1 対象とした学校，学級

東新中学校，第2学年2学級，105名，その中で欠席者を除き100名を対象とした。

上，中，下位群の分類は，第二学期に実施した社会科テスト三回の結果および学校で実施した知能テスト結果と担任教諭の意見を参考にして次のように分けた。

上位群 30名(男15女14) 中位群 40名(男20女20)

下位群 30名(男16女14) 計 男52名 女48名

2 研究した歴史的概念

自由民権運動および日露戦争 これを選んだ理由は前者は比較的，絶対視して考えやすい概念であり，後者は戦争に対する現在の価値意識をあてはめて考えやすい概念である上，一面，政治や戦争に対する社会的態度の形成にも重要な意味をもつ歴史的概念で生徒の思考傾向が比較的よくあらわれるのではないかと考えたからである。

3 調査方法

① 仮説①について

自由民権運動，日露戦争の概念については，その時代的背景となる歴史事象および原因，経過，結果，影響などに関する歴史事象をそれぞれ前者は17，後者は15選び，その他に二つの概念にあまり関係のない歴史事象を含め，25の歴史事象に下記のような尺度をつけて調査した。

自由民権運動

2年組		番号()		氏名					
あなたは「自由民権運動」を考えるにあたって，どんなことを関係づけて考えなければならないと思いますか，下の尺度のところに，あなたの考えに最もあうところを選んで○印をつけなさい。そして，ア・イにつけた場合は，そのわけを書く欄に関係があると思った理由を書きなさい。									
						1	2	3	4
強く関係 があると 思う	関係が あると 思う	少し関係 があると 思う	どちらと もいわれ ない ・わからない	だいたい 関係がな いと思う	関係が ないと 思う	ぜったい 関係がな いと思う			
△1 徴兵制の実施	ア	イ	ウ	エ	オ	カ	キ		

- | | | | |
|-----------------|--------------|------------------|----------------------|
| × 2. 日露戦争 | ○ 8. 自由党の結成 | △ 14. 学制の制定 | × 20. 日清戦争 |
| ○ 3. 大日本帝国憲法の制定 | × 9. 下関条約 | ○ 15. 立志社 | ○ 21. 民選議院設立意見書 |
| △ 4. 東海道本線の開通 | ○ 10. 西南戦争 | △ 16. 太陽暦の採用 | ○ 22. 板垣退助 |
| ○ △ 5. 俸禄の区分 | △ 11. 和親条約 | ○ 17. 西欧の自由平等の思想 | ○ 23. 集会の取りしまり(集会条例) |
| ○ 6. 国会の開設 | ○ 12. 国会期成同盟 | △ ○ 18. 新聞の発行 | △ ○ 24. 藩閥政治 |
| ○ 7. 不平等土族 | ○ △ 13. 地租改正 | △ 19. 大政奉還 | △ ○ 25. 福沢 諭吉 |

- 印は学習内容として予想したもの △印 既習の事象 ×印は未学習の事象である。(調査用紙には、もちろんこの記号はない)
- そして、後述するように、自由民権運動を3校時に分けて指導したので、学習前、第1, 2, 3校時それぞれ終了した後(次の校時)に同一の調査用紙を使用して調査をした。
- 第1回目は、記入のしかたや、歴史事象の読みかたを指導してから記入させた。その際、次の点を特に注意した。
「ア、イにつけた理由を書くときは、必ず、どういふ関係があるのか1の欄に書くこと、教科書にあったから、とか、なんとなく、という理由は、どうしても書けない場合しか書かないこと。」 この点は、第2, 3, 4回目に強調した。
- 第2, 3, 4回目には、次のような指示をした。
・「今、勉強したことにより、前につけた○印を動かすところがあったら動かさない。その場合、ア・イに動かしたり、やはり理由を書きなさい。書く場所は、2回目のときは、理由を書くところの2の欄です。動かしたらその○印に○²を書きなさい。」
・「前に書いた理由が、まちがっていたり、不じゅうぶんであったら、それを、書き直さない。書く場所は3回目なら3の欄です。」
- 時間はだいたい35分前後である。また、調査にあたっては担任教諭と二人で机間巡視し、質問を受け、記入のしかたを指導した。

日露戦争

日露戦争についても同じ方法で実施した。しかし、この事象を直接に指導する計画が、1校時であるので、調査回数は学習前と学習後の2回である。

○学習前の調査は小単元「国交関係の進展」にはいる直前で学習後の調査は韓国併合を学習した直後である。

調査項目は、次のような歴史事象である。

- | | | | |
|-------------|-----------------|-------------------|----------------------|
| ○ 1. 三国干渉 | ○ 7. ロシアの南下政策 | ○ 13. 日本海海戦 | ○ 19. 小笠原諸島の帰属 |
| △ 2. 東学党の乱 | ○ 8. 義和団事件 | ○ 14. 世界の強国のアジア進出 | △ 20. 第1回帝国議会 |
| △ 3. 台湾の領有 | ○ 9. 韓国併合 | ○ 15. 南樺太 | ○ 21. 小村寿太郎 |
| ○ 4. 日英同盟 | △ 10. 憲法の制定 | △ 16. 征韓論 | △ 22. 日本における機械制生産の発達 |
| ○ 5. ルーズベルト | × 11. 日本商品の露国進出 | △ 17. 沖繩の所屬 | ○ 23. ポーツマス条約 |
| △ 6. 自由民権運動 | △ 12. 異国船打払令 | ○ 18. 南満州鉄道の領有 | △ 24. 西郷隆盛 |
| | | | ○ 25. 朝鮮を保護する権利 |

② 仮説②について

仮説②は生徒が歴史事象をどのように解釈し、感じとっているかを検討するのであるが、このような調査方法については、未開拓な面があるので、最近、経済的分野で発達しているイメージ調査法を参考にした。この場合のイメージとは特定の時点において、特定の個人により、特定の対象に対し、特定の主要な共通次元にわりあてられた判断 element の総和⁽⁸⁾ という意味である。この測定法としては、イメージプロフィール法 cip (company image profile) S, D法、深層面接法など⁽⁹⁾ があり、それぞれ特色をもつわけであるが、ここではイメージプロフィール法を選んだ。その理由は、調査項目が具体的な判断の形で提示されるので、児童生徒が反応しやすくまた結果も具体的にわかりやすい長所をもつからである。しかし、これはそれぞれの次元が独立しているという保証がないのが欠点である。

そこで、尺度の対になる判断として、日本語の意味尺度研究会の研究による形容詞の対⁽¹⁰⁾ を選び、自由民権運動、日露戦争のそれぞれについて、その原因、経過、影響などを、どのように感じとっているか測定できるように以下のような尺度を作成した。

あなたは「自由民権運動」について、どのように感じますか、下の例のように、自分の感じたところに○印をつけなさい。

たいへん すこし どちらでもない すこし たいへん

例 きれい _____ (○) _____ きたない

	2	3	4
たいへん すこし どちらでもない すこし たいへん			
1. この運動 はただし ましい			
_____ まちがった運動 である			

- | | |
|---|--|
| <ul style="list-style-type: none"> 2. 自由に運動ができた ———— 束縛された運動であった 3. この運動は活動的である ———— この運動は不活発である 4. 運動の行なわれた範囲は広い ———— 運動の範囲がせまい 5. この運動の影響は大きい ———— 運動の影響は小さい 6. この運動は一貫している ———— この運動はむじゅんして
いる 7. やさしい運動であった ———— むずかしい運動であった 8. 積極的な運動だ ———— 消極的な運動だ | <ul style="list-style-type: none"> 9. 運動をした考えが深い ———— 運動をした考えがあさい 10. 安全な運動であった ———— 危険な運動であった 11. 運動の方向が新しい ———— 運動の方向が古い 12. 純粋な運動であった ———— 不純な運動であった 13. このような運動はすきだ ———— このような運動はきらいだ 14. 考えかたがすどい ———— 考えかたがにぶい 15. この運動はよい ———— この運動は悪い |
|---|--|

・調査方法は、仮設①についての調査後、この調査を実施した。調査回数は前の調査と同じく4回で同一の調査用紙を使用した。

・第2回目から、次のような指示をした。

「今日の勉強を通して、前に○印をつけたところで動かすところがあったら動かさない。動かしたら、その○印を○₂と書きなさい。そして、その動かした理由を、2という欄に書きなさい。」

日露戦争

形式は自由民権運動の場合と同様で、尺度の対は下記の通りである。

- | | |
|--|---|
| <ul style="list-style-type: none"> 1. この戦争はただし
ましい 2. 長い戦争であった 3. そのころの日本の大陸進出
ははげしい 4. 戦争の影響は大きい 5. 戦争の結果をうれしく思う 6. この戦争は日本が積極的に
起こした | <ul style="list-style-type: none"> 7. 日本は強い 8. この戦争はよい 9. 勝つことのわかって
いた安全な戦争だ 10. 戦争の範囲は広い 11. 戦争の原因は複雑だ 12. この戦争はきらいだ |
|--|---|

調査時期、回数は仮設①の日露戦争と同様である。したがって調査は学習の前後2回だけであるので、○印を動かした理由は書かせなかった。そして学習を通して最も印象に残っている項目の一つ選ばせ、それについて、そこに○印をつけた理由を書かせた。

○上記の調査のうち、自由民権運動については、一部の生徒と放課後、面接を行なって反応の理由などを聞いた。

③ 仮設の司について

生徒が学習の結果、歴史事象をどのように受けとめ、どのような考え方をもつに至ったか意見調査を行なう事にした。これは、自由民権運動および日露戦争に対する考えや感じを文章で記述し、それに対する肯定と否定の反応を示す尺度を下記のような形式でつけた。記述した文章は仮設①、および②の調査結果にあらわれた子どもの反応傾向から次のような五つの内容に基づく意見を自由民権運動には30問、日露戦争には20問を作成した。(それぞれの問題文は結果の考察で示すことにする)

自由民権運動について

- A. 史実をふまえて批判的な意見や建設的な意見を述べたもの 6問
- B. 運動の起り、経過、影響などを史実に即して客観的に述べたもの 6問

- C. なんとなくよいというばかりでぜんとした受けとめ方を述べたもの 6 問
- D. 自由、平等ということですべてを肯定したり美化した見解を述べたもの 6 問
- E. 反政府的、批判的言動を否定する考えを述べたもの 6 問

日露戦争について

- A. 日露戦争を批判する見解を述べたもの 4 問
- B. 日露戦争の原因、影響に関する客観的な叙述と当時の日本人の心情を述べたもの 4 問
- C. なんとなくよいとか悪いというばかりでぜんとした受けとめ方を述べたもの 4 問
- D. 日露戦争を道徳的な観点から強く否定した見解を述べたもの 4 問
- E. もっと戦争をしてでも積極的に発展したほうがよいという見解を述べたもの 4 問

以上の内容の記述とそれに対する意見の尺度として次のような形式で実施した。

あなたは自由民権運動の学習を通して、下のそれぞれの文についてどのように思っていますか、左側の尺度のところから下の例のようにあなたの思ったこと（感じたこと）にあうところに○印をつけなさい。

そう思う	そう思う	どちらでも	そう思わない	そう思わない
強く	少し	ない	少し	強く
よい	○			わるい

1. 民選議院設立の意見書の提出 について

ア. 自由や平等ということで行動するならばすべて立派なことだと思う。

そう思う	そう思う	どちらでも	そう思わない	そう思わない
強く	少し	ない	少し	強く

調査時期は学習の終了した約10日後で、調査時間はそれぞれ約25分程度である。

4 学習指導

単純に生徒の思考傾向を取り出すには指導の条件を捨象する方法を考えなければならないが、そうすると一面、指導上の問題点を具体的に指摘することも困難になる。この研究は前にも述べた通り学習指導と関連づけて研究する意図をもっているため、学習指導の過程の中で調査をし、その指導条件の下での思考傾向や態度形成上の問題点を事例的に検討することにした。

そこで、自由民権運動や日露戦争については、次のような計画で指導を実施した。

- 二学期を同一教師が同一内容で同一資料、教具を使用して指導をした。
- 指導上の実験的意図は別がない。ただし、自由民権運動については、学校放送を録音したものを利用した。これは、イメージの形成に大きな影響をもたらすであろう、という予想をもったからである。
- 指導計画は、小単元「立憲政治の発達」の中の自由民権運動を次のように3校時に分けて指導をした。

- 第1校時 自由民権運動の起こり
- 第2校時 自由民権運動の高まり
- 第3校時 自由民権運動の結末とその影響

- 実施時期 1月上旬 調査は前に述べたごとく第1校時の直前と各校時の直後である。

日露戦争

- 小単元「国際関係の進展」で、これは次のような計画で実施した。

- | | |
|-------------------------|-----------|
| 第1校時 世界の強国のアジア、アフリカへの進出 | 第4校時 日露戦争 |
| 第2校時 日清戦争 | 第5校時 条約改正 |
| 第3校時 三国干渉と中国の分割 | |

- 調査は、第1校時の直前と第4校時の直後の予定であったが、韓国併合が第5校時に延びたので、その学習直後＝5校時の途中に行

なった。

●実施時期 1月下旬

V 研究内容

1 指導の概要

自由民権運動

第1校時 自由民権運動が西欧の自由平等の思想に基づき、当時の藩閥政治に反対し議会政治の実現を目指して起きたことを理解させる。

1. 日本が近代国家になるためには、まだどんなことをしなければならなかったか (問答)

- 議会政治 ●産業の近代化 ●条約改正など
- 議会在最初に開かれたのは明治23年

2. 議会＝国会が開かれるまでにどのようなことが行なわれたか (年表を見て作業, 2分, 後問答)

- 民選議院設立意見書が出された 1874年
- 国会開設の詔勅が出された, 自由党の結成 1881年
- 内閣制度の創設 1885年
- 大日本帝国憲法の制定 1889年

この中で国会を作ろうということを出したのはどれか

3. どうして、このような意見書が出されたのか

(教科書を見て作業, 後, 資料による問答)

ア. 意見書を出した人々, 板垣退助, 後藤象二郎, 副島種臣など

イ. 意見書の内容 特定の者だけによる政治をやめ, 民選議院を設立せよ (意見書…プリント)

ウ. 意見書を出した理由 (意見書から考えさせる)

- 政府が自分かつてに法律を作り政治をしていた…藩閥政治
- 自由平等の思想

4. 藩閥政治とはどういう政治か (資料プリントによる問答)

ア. 明治初期の政府の中心人物と出身の藩

イ. 征韓論以後の政府 薩, 長の藩出身者による政治

ウ. 土佐, 肥前の藩出身者が, この民権運動の中心人物

※ このところで運動の初期の性格の説明が不足であった。

5. この運動の思想的根拠となった自由平等の思想はどのような人々たちによって紹介されたか (復習および学校放送)

ア. フランスやイギリスの思想の影響

イ. 学校放送 (録音テープによる)

- 西欧の思想を身につけ, 新しい日本を作ろうとした先覚者 福沢諭吉, 加藤弘之, 西 周

●福沢諭吉の思想の紹介

・欧米の考えを積極的に取り入れ, 「学問のすすめ」を著わす

・「学問のすすめ」の内容, 特に書き出しの「天は人の上に

人を作らず人の下に人を作らず」を紹介

ウ. 整理, 今の紹介された人はどんな人か

6. このような思想に基づいて民選議員を設立しようとする運動を自由民権運動ということの説明

第2校時 自由民権運動が政府の弾圧にもかかわらず全国的な政治運動として発展したことを理解させる。

1. 復習

●民選議院設立意見書, 藩閥政治, 西欧の自由平等の思想の影響

2. 自由民権運動は, どのように広まったか

ア. 学校放送 (録音テープによる)

●聞く要点を示す, 何によって広まったか, どのように広まったか

●どんな政治団体に発展したか

●父と子の対話によって構成 — 意見書の内容が号外によって知らされたこと, 人民も天下の政治に参加すべきである, という内容についての問答

●徳富蘆花の自叙伝 — 演説会, 新聞などで広まり, 国会, 自由民権, 権利, 義務, 政党, 板垣などという文字に引きつけられた

●北は北海道, 南は九州まで全国的に広まった

●明治13年 国会期成同盟ができる

イ. どのように広まったか (問答, 教科書利用)

●新聞, 号外, 演説会などにより, 北は北海道から南は九州まで広まった そして国会期成同盟ができた

●どういった人々が参加したか (教科書で作業, 後問答) 地方の地主, 貧農, 商工業者, 不平士族, 女性では景山英子

●どうして士族が参加したか説明 俸禄の処分, 徴兵制などで昔身分制度にささえられ武士が政治のしかたに不満をもったこと

●地主, 貧農は地租改正によって高い税をかけられ, それに伴って小作料が高まり政治のしかたに不満をもったことの説明

●商工業者は政府に關係の深い特定の大金入だけがたいせつにされ, また, 紙幣発行によるインフレなどで政治のしかたに不満をもった

●どのような団体として発展したか (教科書で作業)

意見書を出してから, 5, 6年の期間で立志社—愛国者—国会期成同盟として発展

3. 政府はこのような運動の発展に対して, どうしたか

ア. 学校放送 (録音テープ)

●対話の形式で構成される 集会条例や新聞条例を作り, 運動の記事を載せた編集者は, 豚箱にぶちこまれた

- ・大阪の期成同盟の集会の弾圧、その結果かえって運動が盛り上がり反政府的になったこと

イ. 政府のとつた対策を整理し、教科書のさし絵で説明

- ・集会をもつ場合、3日前に届け出ること、屋外で集会をもつてはいけない
- ・集会をもつていいか悪いか、集会を途中で止めさせる権限をその地方の警察署長がもつたこと
- ・新聞で自由民権運動が正しい、というような記事を書くことと編集者は、誹謗にぶち込まれたことなど

第3校時 国会開設の詔勅が出され、政党の結成へと進んだが、政党間の反目や政府の弾圧により運動が衰えたことを理解させる。

1. 復習

- ・民権運動の広まり、参加した人たち、政府の弾圧

2. 学校放送 (録音テープ)

黄く要点を示す、政府はどうしたか、民権運動の発展、その影響、対話形式による構成

- ・伊藤博文と岩倉具視の対話 国会開設の約束をして民権を認めそのかわり義務でしほろう
- ・1881年、国会開設の詔勅、発せられる
- ・それに対して、民権運動の側で国会開設に備えて自由党や立憲改進黨が結成された
- ・政府の弾圧はますますきびしくなり、それに対し福島事件、秩父事件などの反抗事件がおきる
- ・自由民権運動はひろむことなく進められ、その結果、明治22年憲法が公布され翌年国会の開設をみた

3. その整理

ア. 10年後に国会を開くという約束をした

- イ. それに対し、民権運動の側では自由党、立憲改進黨などの政党を作つて準備した

ウ. 影響として、大日本帝国憲法が公布され国会が開かれた

4. 自由党、立憲改進黨はどのように作られたか

ア. 自由党について (教科書で作業、後問答)

中心 板垣退助 1881年、フランスの民権思想の影響を受けて結成

イ. 立憲改進黨について (教科書で作業、後問答)

中心 大隈重信 1882年 イギリスの立憲政治を手本として結成

5. 政党は、どのように発展したか (教科書を読ませ問答)

ア. 政府の弾圧がきびしくなり、世の中が不景気になった

イ. 二つの政党は分裂、あるいは解散した

ウ. その理由を説明

- ・自由党に参加した人たちは、いろいろ階層が異なっていた。そこで世の中が不景気になるにつれて、貧困な人たちは生活に困って暴動をおこすようなことがおきた

- ・政党同志の関係がうまくゆかず感情的に対立した

- ・板垣退助は三井の援助で、外国へ遊学した

- ・新潟県における高田事件 (新潟日報の「太陽を求めて」を使用) 高田事件の中心人物、赤井のことについて新聞記事を読み説明

- ・大隈重信は引退し、立憲改進黨は分裂する

- ・運動は尻つぼみになって衰えた

6. しかし、この運動は日本の政治の近代化に大きな影響を与えた
日露戦争

小単元 国際関係の進展 第3校時

日清戦争後、日本は外国の進出政策とぶつかり三国干渉を受けたこと、清が列国の進出によって実質的な植民地になった事情を理解させる。

1. 復習 日清戦争の原因、結果、下関条約など

2. 日清戦争後、10年たつと日露戦争が起きるが、それまでのアジアのようすが、どのように変化したかをみよう

ア. 10年間の間に日露戦争に關係のありそうなきごととしてどんなことがあるか (年表を見て作業)

- ・三国干渉、北清事変、日英同盟

3. 日清戦争の結果、外国が日本に対して、どのように動いたか (教科書を読ませ問答)

ア. ロシア、フランス、ドイツが朝鮮の独立をおびやかし、東アジアの平和をおびやかす、という理由で日本に遼東半島を返させた

イ. 日本の国民感情… 残念がり政府をせめる。しかし、当時の国力では、これをはね返すことは無理であった

ウ. その結果、軍事産業に力を入れて軍備の充実を図る (資料プリントにより清からの賠償金の使途を読みとらせ説明)

エ. このようにしたのは、どんな国を考えているか… ロシア

4. 戦争に負けた清に対する国民の意識はどうか (教科書利用)

ア. 国民の中に韓国人や清国人をあなどる者がいた

イ. いっぽうでは、この次は、という気持ちで軍備を充実した

5. 戦争で負けた清は、どうなったか

ア. ねむれる獅子といわれた清が小国の日本に負けた、というのでどのように列国から侵略されたか (列強の中国進出の地図で考えさせる)

- ・それぞれ港湾、鉄道、などをあげて、どこの国にとられたか いわせる

- ・列強の中国における勢力範囲を読みとらせる

- ・遼東半島はロシアに、アメリカも進出してきたことを指摘する

6. 清のこのような状態に対して、どんな運動が国内でおきたか

ア. 国内で国をたてなおそうという運動がおきてきた

イ. 立憲政治を目ざした康有为らの改革は失敗に終わった

7. 外国人を排斥しようとして北清事変（義和団事件）がおきた
（教科書と資料プリントによる問答と説明）

ア. 外国人の排斥運動として北清事変（義和団事件）がおきた

イ. 北京から黄河の北側、南満州あたりが最もはげしかった

ウ. 北京には各国の大使館、公使館があつたから外国もだまつて

カ. いず出兵した

エ. 日本は全体の約三分の一の兵力を出兵した

オ. 義和団事件を各国の入たちはどう見たか、当時の司令官、軍
入の意見をプリントし読みさせる。清や清国人が非常に軽視され
ていたことを指摘する

第4校時

1. 復習

・三国干渉、中国に対する列強の進出、北清事変

2. 北清事変後の諸外国のようすはどうか

ア. ロシアはどうか（教科書で作業、後問答）

・ロシアは兵を満州にとどめ、鉄道をしき朝鮮に進出しようとし
た

・また、そのころ中央アジアから印度へも進出しようとしてい
た。

イ. イギリスはどうかあつたか

・イギリスはインドとどういう関係があつたか…植民地

・イギリスと日本は日英同盟を結んだ

3. 日英同盟はなぜ結ばれたか（説明）

ア. ロシアの満州から朝鮮に進出しようとした政策は日本に影響
したし、イギリスも警戒した

イ. インドに進出しようとする政策でもイギリスとロシアは対立
した。

ウ. ヨーロッパでも、イギリスは、ロシア、フランス、ドイツと
対立していた（日、イギリス、ロシアの関係図を板書して説明）

エ. 日英同盟の内容（資料プリントで説明）互いに戦争が起き
たら助け合うこと、ロシアを目的としていること

4. 当時の日本国内における世論（説明）

ア. 三国干渉以後、一般的にロシアと戦うべきだという意見が強
かつた東大工学部教授団の声明、栗山清の意見、当時の新聞に
出た投書の紹介

イ. 反戦論 内村鑑三の反戦論、万朝報、平民新聞など、幸徳
秋水の意見

4. 戦争はいつ始まり、どのような経過をたどつたか

ア. 戦争はいつはじまつて、どこが戦場か（教科書で作業、後掛
図で指導）

・おもな戦場は南満州、旅順、奉天の戦い、日本海海戦（バル
チック艦隊の経路、戦いの結果）

イ. 戦費および損害（日本、およびロシアの損害の統計プリント）

・戦死者は日本が約2倍、負傷者はほぼ同じ

・費用は約20億、そのころの日本の歳入は約1億、20年分
を使う

ウ. 結果 日本は戦費、兵力を減らさず、ロシアでは国内で皇帝に対
する反抗運動が起きてくる

5. その結果、どのような講和がなされたか

ア. ルーズベルトの仲裁

イ. ポーツマス条約の内容、（教科書で作業、後問答）

ウ. 南樺太を領土に加え、関東州の租借権を得、南満州の鉄道を
譲り受ける

エ. この結果、日本の勢力が南満州へ伸びることになった

2 歴史事象に対する理解傾向と学習態度

ここでは、まず歴史事象に対する理解傾向からその背後にある学習態度を考察し、ついで以下の節でその理解状態と関連して歴史事象に対する感じ方、見方の問題を検討することにする。

(1) 関係づけようとする歴史事象からみた理解傾向と学習態度

仮説①に関する調査結果を、生徒が関係づけて考えなければならないとしたもの（つまり、ア、イ、に○印をつけたもの）を上、中、下位群毎、回数毎に集計して示すと1図および2図のようになる。

これをIで示した指導条件のもとで、生徒の思考傾向を考察することにする。

① 学習前において関係づけようとする事象は既有知識の⁽¹⁾効にことばの表現が似ている事象が多い。

自由民権運動では板垣退助が学習前から多いがこれは既有知識によるものである。その他多い事象を見ると自由平等の思想、自由党、国会など自由、民権などのことばの表現が比較的似ている事象である。日露戦争では、そうはっきりした傾向を示していないが、ロシアの南下政策、日本海海戦などはその傾向を示すものといえよう。

以上のことは、生徒が概念形成の初期においては既有知識によるほか、ことばのもつ意味を媒介にして事象を結びつけようとする傾向があるといえる。これは、関係ありと判断した理由を検討すればさらに明瞭になるので後で検討することにする。オルポートは、思考の慣性として、個々の事象を類型化し、似たような見出し項目の中にその事象を位置づけそれにしたがって行動しようとするはたつきがあることを指摘し、これをカテゴリーとよんでいる。⁽¹⁾ 生徒が概念形成の初期には自由、民権、運動というようなことばの意味から一つの群として関係づけようとする傾向が見られるわけである。

日露戦争では、事前の反応が一般的に少ないのは内容が複雑な上、既有知識が乏しいこと、ことばの意味から直接結びつけられる事象が少ないこと、また調査になれてきて、最初はわからないとしておこうという意識がはたらいたのではないかとすることも考えられる。日本海海戦を関係ありと判断する生徒が案外少ないことは現代の生徒がもつ知識の性格を示しているといえよう。

② 学習を通して、関係づけようとする者が多くなる事象は経過や結果を示す表面にあらわれる事象である。自由民権運動では、立志社、国会期成同盟、など政治結社の名称、民選議院設立意見書、集会条例（取りしまり）藩閥政治、などである。

日露戦争では、講和条約に関係ある人物、名称、領土、日英同盟などである。

これらから次のようなことが考察される。

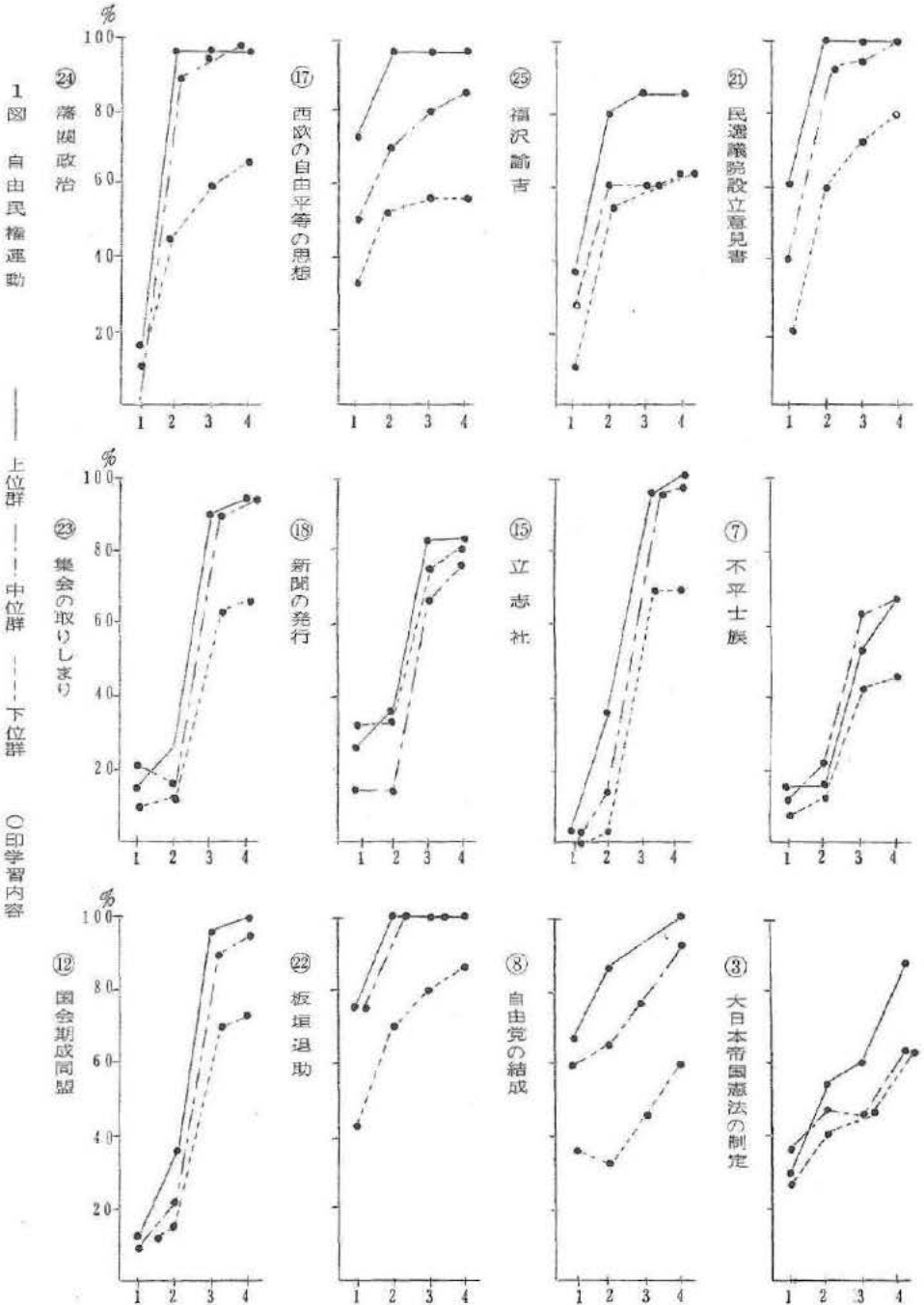
ア、概念に含まれる関係がいずれも明瞭な事象である。

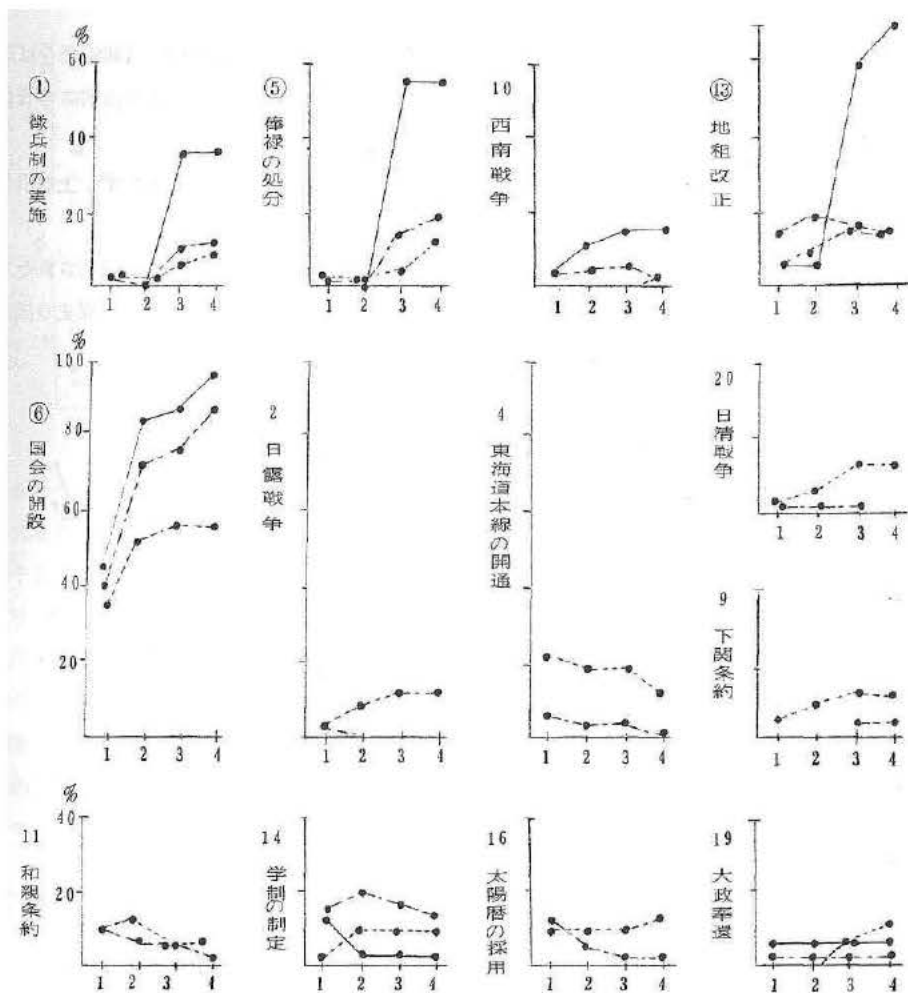
イ、自由民権運動では、これらの事象は学校放送のドラマふうな構成の中に盛りこまれた内容で生徒の印象を深めていることも否定できない。

ウ、次に政治結社の名称とか、講和条約に関する事象に敏感に反応する思考傾向には、テストに対する潜在意識というものがないだろうか、ということが考えられる。面接において、ある生徒が「記憶力がないので歴史は苦手だ、それでともかく、まずおぼえようすることに努力する」といった。この点を他の生徒にも聞くと「自分も同じです」と答えている。実はこのあたりに大部分の生徒の歴史学習に対する根本的な構えがあるのかもわからない。たとえば、日本海海戦が案外

増加せず、条約に関する人物、内容、名称など増加していることは、戦争のことよりテストに関する知識的なものにウエートをかけている生徒の意識があるのではないかと考えられる。

③ 概念に関係のある固有名詞で、関係ありと判断しない事象を考察すると、教科書のみだし





や、その上欄などに要約した事項に影響され、歴史の流れとして関係づけようとしないう傾向が見られる。

自由民権運動の場合は、自由民権運動という主題で3時間学習され、また学校放送で西欧の自由平等の思想や運動の影響などに関する印象を深めているのでその傾向はあまり見られない。しかし、日露戦争の場合、三国干渉、義和団事件、韓国併合などについて見ると、次のような反応を示している(最後の調査で、上中下に分けてない)

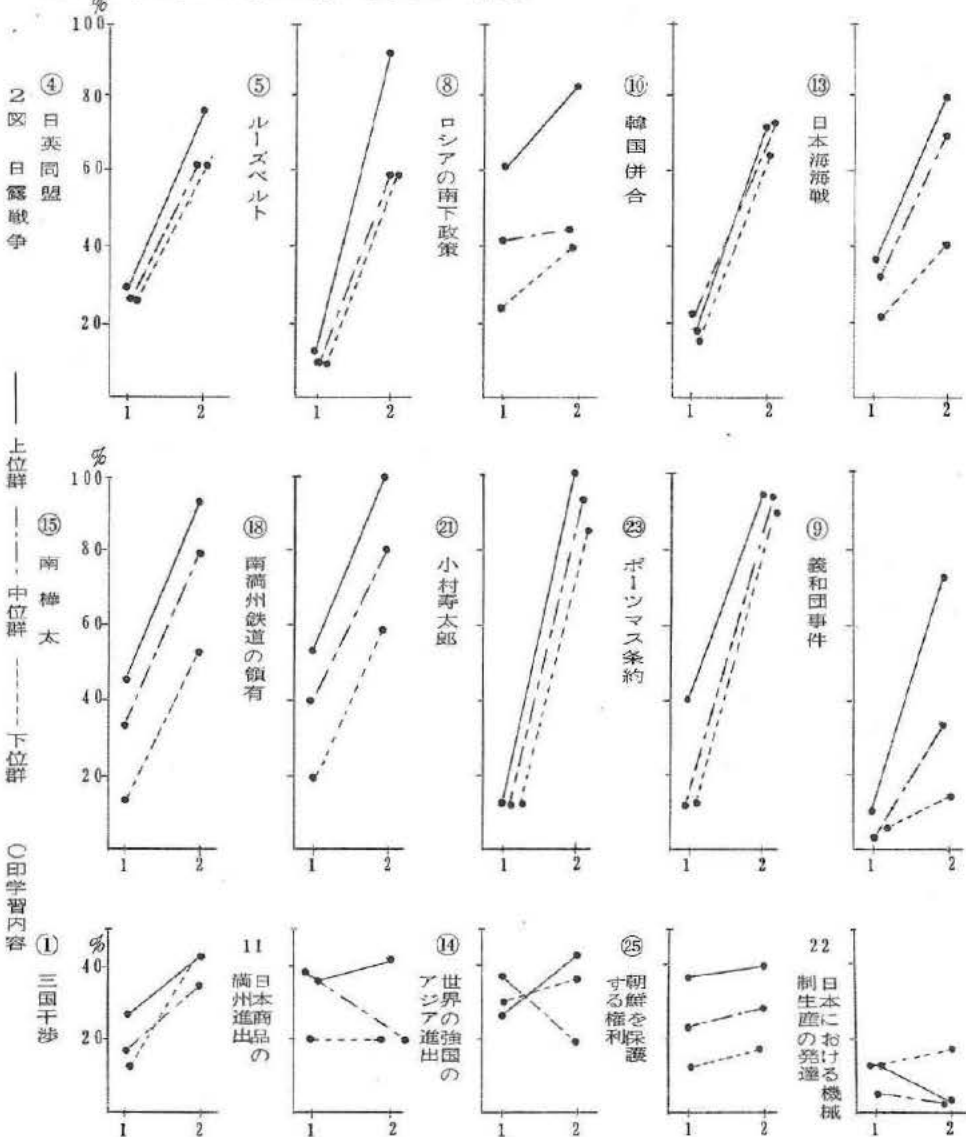
1表	関係あり	少し関係がある	どちらでもない わからない	だいたい関係 がない	関係がない (カ、キ)	計
三国干渉	40	38	4	3	15	100
韓国併合	71	12	10	1	6	100
義和団事件	34	24	23	7	12	100

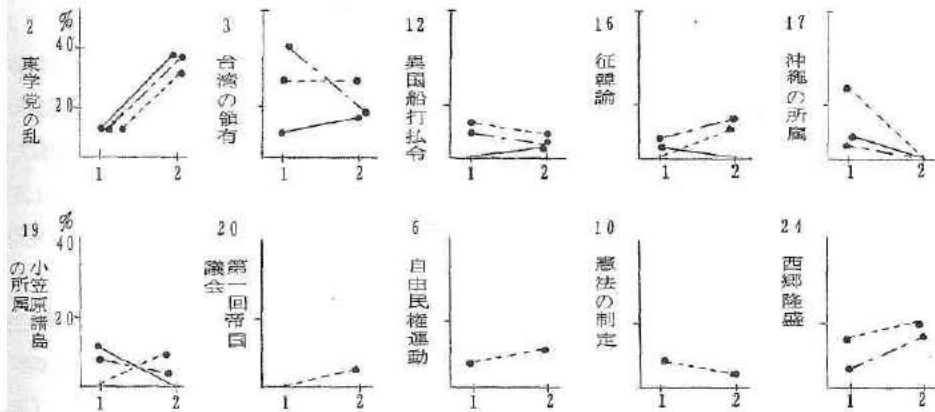
そこで、これらの事象は、少し関係があるという意識の生徒もいるが関係ありとする者が少ないのは、ア。義和団事件は東学党の乱と混同されている点もある。

イ。いずれも、日露戦争という主題の一枚時の学習内容に含まれていない。(韓国併合は計画では含める予定であったが時間がなくて次の時間にまわした。しかし調査の直前に学習したことを思えばこの反応は少ないといえる。)

ウ。教科書のみだしの(ゴチックで示される)日露戦争の記述内容には含まれず、上欄の要約した項目、①原因、②日英同盟、③戦争、④ポーツマス条約の中にもない。

このような点から考えると、生徒は、教科書のみだしのもとに書かれた記述内容、要約された項目、その概念を直接学習した時間の内容などに制約されて、前後に学習した内容を一連の歴史の流れとして関係づけようとしにくい傾向があるといえよう。





④ 関係があるにもかかわらず関係づけようとしなない歴史事象は、その時代的背景となり、間接的な影響をもたらしている歴史事象である。そして、これらの事象を関係づけようとしなない意識が、自由民権運動や日露戦争を広く歴史の流れに位置づけられず、また多面的に考察できず美化したイメージをもったり、単純なわかりきった見方をする結果を生む原因となっている。

自由民権運動では、徴兵制の実施、俸祿の処分、△西南戦争、地租改正、不平等士族などであり、日露戦争では、三国干渉、世界の強国のアジア進出 △日本における機械制生産の発達 △日本商品の満州進出などである。(△印は、指導の影響が明瞭なので後に述べることにする)

これらの反応の変化を見ると次のようになる。(関係あり＝＋2 少し関係がある＝＋1 わからない、どちらともいえない＝0 だいたい関係がない＝－1 関係がない＝－2とする各回100名)

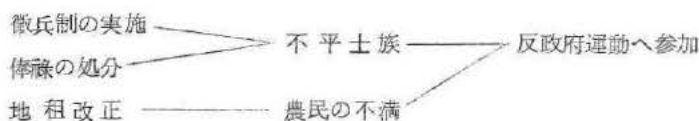
2表	回数	+2	+1	0	-1	-2
徴兵制	1	2	19	40	10	29
	2	1	12	36	13	38
	3	17	18	32	10	23
	4	19	15	30	10	26
俸祿の処分	1	2	12	55	3	28
	2	2	9	57	5	27
	3	26	18	40	11	15
	4	29	17	40	2	12
地租改正	1	5	23	23	13	38
	2	4	16	23	14	43
	3	30	22	11	10	27
	4	37	24	9	8	22
日露戦争	前	25	24	25	9	17
	後	33	36	20	5	6

以上のように、学習前から、わからない、関係がないと考えている者が非常に多い。そして、それが変化するのは3回目の調査であり、その理由は第2校時の第2分節で学習したからである。

しかし、その変化が、政治結社の名称のように大きな変化がない理由を考察すると

ア. 既習内容であり、教師もまた説明をしたけれども、徴兵制とか地租改正とかことばの意味する内容を理解してない生徒が一部いることが面接によりわかった。

イ. ことばの意味する事がわかった生徒でも、次のような関係をよく理解できなかった生徒がいる。



以上、反応としてあらわれた結果は理解できなかつた、といえよう。しかし、なぜ理解できなかつたのか検討するとすべて指導の責任とはいえない。後で述べるが、これは前の時代のことだと考える意識と学習場面における消極的な態度が大きく影響しているからである。第2分節の授業記録で検討すると教師が教科書により不平士族、農民、商工業者など多くの人々が参加したことをとらえさせ、どうして、こういう人たちが参加したのかを考えてみよう、といて俸祿の処分や徴兵制の実施について復習し、たのような事態になると、政府に対してだれが不満をもつか」という発問をした。挙手は一名もなく三名ほど次々に指名したが、あまり考えず「わかりません」と答え、最後に優秀な生徒が「武士だと思う」と答えている。運動が全国的に広まったという現象的なことは後で述べるが非常に強くとらえている。しかし、その現象の原因を前に学習した史実と関係づけて考察しようとする構えが乏しい。教師がある程度答えられる程度の情報を提供してもそれをよく考えて、たとえばまちがっても自分の考えを述べるという態度がみられない。どうせ、後から説明してくれるだろうという受身の態度である。歴史は事象相互が網の目のようからみ合せて発展しているが、それを、そのように記述したり教えたりすることは容易でないからある主題のもとに整理される。そうすると学習の主題が変わったりすると現象的なとらえやすい事象だけが強くは握してそれを既習の事象と関係づけて歴史の流れに位置づけて考察しようとする構えが乏しく、学習の場面においても深く考えず消極的な受身の態度で学習しているわけである。滝沢武久が、社会認識では目に見えぬ原因がいちばんたいせつである⁽¹²⁾と述べているが、そのためには、生徒が事象を多面的に関係づけて考察する態度の形成が重要であるといえよう。

こういった点では日露戦争における世界の強国のアジア進出という事象でも同様で、それと日本との関係において戦争が開かれているにもかかわらず、直接日露戦争という小項目の中に含まれないと関係づけようとしなければかりか、かえって2図にみられるごとく中位群のごときは学習前より減少するという傾向がみられる。そして、こういうことが後で述べるように事象を歴史的にみることを妨げ史実に基づかない美化した見方をもったり、単純に割り切った見方をもつ結果になっているわけである。

⑤ 指導の影響が明瞭なのは、④で△印を付した歴史事象である。

自由民権運動の高まりが、西南戦争の敗退による武力闘争から言論闘争への転化を、2時間目の第2分節において、もっとくわしく説明すべきであった。

日露戦争では、経済的事象の反応が低いのは、学校の指導計画で、次の小単元「産業の近代化」でこのような事象を指導することになっているからである。この点は事前の打ち合わせが不備であった。

しかし、このような生徒の反応状況から見ると後の学習で戦争の経済的側面を、日露戦争とうまく関係づけられるかどうか疑問である。したがって、指導に際して、後でまた指導されるとしても、この時期における日本産業の飛躍的發展と、それに伴う市場の問題などを伏線としてふれておくことが必要であろう。要するに歴史の指導においては、その事象を、それだけとして取り上げず、広範囲な流れの中に位置づける配慮が必要である。

ここでは、自由民権運動を例にとり、関係があると判断した歴史事象について、その判断の理由から思考傾向を検討してみたい。

① 学習前において関係があると思った理由を検討すると学習前における概念形成の初期の思考傾向がみられる。

ア. 既有知識を適用する

- たとえば 2 板垣退助 ◦この人が中心になって運動をした
2 5 福沢諭吉 ◦この人の書いた本が民権運動に影響した

イ. 生活経験からの類推がある。

- たとえば 1 8 新聞の発行 ◦新聞は思想を広く伝える
◦世の中のできごとを早く知らせる
◦自由に他のことを知ることができる
◦新聞は世論を高める

ウ. ことばの意味からの連想がある。

3, 大日本帝国憲法

- 自由民権 — 自由 — 憲法 ◦定めた憲法には国民の自由がなかったからこの運動がおきた
自由民権 — 国会 — 憲法 ◦自由のために国会が必要だし憲法はその基本だ

6, 国会の開設

- 自由民権 — 自由 — 国会 ◦国会を通して自由をさげんだ
平等
◦国会が開かれると平等になる
◦国会が開かれると自由になるからよい

- 自由民権 — 政治 — 国会 ◦自由民権は政治に関係が深いから政治に関係がある

8, 自由党

- 自由民権 — 自由 — 自由党 ◦自由党ができたから運動ができた
◦自由民権が起これば自由党が結成される

1 7. 西欧の自由平等の思想

- 自由民権 — 自由平等 ◦自由平等の思想を議会にとり入れた
◦自由平等の思想を広めた

- 自由民権 — 自由 — 西欧 ◦自由は、ヨーロッパのまねをした
◦日本人が、西欧からいろいろな考えをもち帰った

2 1. 民選議院設立意見書

- 自由民権 — 政治 — 設立意見書 ◦自由民権も設立意見書どちらも政治に関係がある
◦政治には国民からいろいろ意見を聞くことが必要だ

- 自由民権 — 自由 — 民選議院 ◦自由のためには議院が必要だ
◦自由のために市民の意見をとり入れることが必要

1 8. 新聞の発行

自由民権運動—運動—新聞 ○運動をするために新聞が必要なので発行した。

以上の例のように、自由、平等、政治、国会という意味を媒介にして、事象との関係をとらえようとしている。このような意味が媒介としてはたらくときは、それが内部刺激となって自由民権運動という事象のあるイメージをもつことは当然予想される。この点についてはイメージ形成の傾向で検討することにする。

学習を通して、どのように情報を受け入れ事象を関係づけようとしていったか検討すると次のようなタイプがみられる。(〔 〕は関係があると判断した事象、関係がないと考えた理由もある。)

A	B	C		D
2 回 目	2 回 目	2 回 目	3 回 目	3 回 目
〔大日本帝国憲法の制定〕 3. 先生がいった 〔民選議院の設立の意見書〕 2. 1. 先生がいった 〔国会の開設〕 6. 先生がいった	〔藩閥政治〕 2. 4. きょう学んだから 〔国会の開設〕 6. きょう学んだから 〔和親条約〕 1. 1. 条約は前に学んで関係がないから 〔板垣退助〕 2. 2. 板垣退助らが中心となって自由党を作った 〔民選議院設立意見書〕 きょう学んだから	〔藩閥政治〕 2. 4. 明治いしんの時にかつやくした人が集まって政治をしていたことだから民権運動にかんけいがあると思う 〔徴兵制の実施〕 1. 明治いしんのすぐ後で行なったものだから関係がない 〔日露戦争〕 2. 国内のことではないから 〔東海道本線の開通〕 4. 鉄道にはかんけいがない 〔俸禄の処分〕 5. 武士がいたところの場合だからかんけいがない 〔地租改正〕 1. 3. 明治いしんのときに行なったものだからかんけいがない 〔新聞の発行〕 1. 8. 国内の発展のことだからかんけいがない 〔大政奉還〕 1. 9. 明治いしんの前のことだからかんけいがない	〔俸禄の処分〕 5. 士達は、はんぱつ政治に関係があったから、俸禄の処分にも関係あると思った 〔不平士族〕 7. 5番のわけと同様 〔国会期成同盟〕 1. 2. 授業でわかった 〔立志社〕 1. 5. その運動の中心となったところだから関係がある 〔藩閥政治〕 2. 4. 民権運動をやったわけは、はんぱつ政治を行なわないで自由民権が目的だったから、はんぱつ政治の人と、争そつたからかんけいがあると思う	〔立志社〕 1. 5. 立志社は政治に不満をもつ人たちや新しい考えを持つ人々が集まって作ったものだから 〔徴兵制の実施〕 1. 徴兵制の実施によって兵士の仕事は武士だけの仕事でなくなり、武士たちは政府に不満をもった 〔俸禄の処分〕 1. 5. 昔武士がもらっていた俸禄をはいしたため、武士は金がはいらず政府に不満をもつようになった 〔不平士族〕 7. 武士の政府のやり方に対する不平不満が高まって反乱を起とした 〔国会期成同盟〕 1. 2. 板垣退助らが中心になって結成した集まりだから 〔地租改正〕 1. 3. 地租改正により地主は政府に土地のねだんの3%~2.5%の高い税をはらわなければならず、小作人は地主から多くの小作料をとられるので、それらの人々は、政府のやりかたに不満をもった
3 回 目 〔不平士族〕 1. 7. 教科書に書いてあった 〔国会期成同盟〕 1. 2. 先生がいった 〔立志社〕 1. 5. 教科書に書いてあった 〔新聞の発行〕 1. 8. やはり教科書に書いてあったと思うが、自由民権運動をやるには、新聞発行が必要だと思う	3 回 目 〔国会期成同盟〕 1. 2. 自由民権運動のきっかけができたから 〔立志社〕 1. 5. 自由民権運動に参加した人々 〔新聞の発行〕 1. 8. 新聞などで知らせたから 〔集会の取りしまり〕 2. 3. 斬わりなしに集会などをやってはいけない。			

ア. Aは、学習を通して常に先生がいった、とか教科書に書いてあったからという理由で関係づけようとしているタイプである。下位群や中位群の一部にこのような傾向がみられるので、次の上中下群の相違で検討することにする。

イ. Bは、だれが、どんな政治結社をつくり、どんなことをしたか、という事象を特に25項目の中で意識して、その理由を書いたものである。このようなタイプはいちばん多いのであるがこれらの特色は板垣退助—自由民権運動を中心になって進めた、立志社—自由民権運動に参加した人々、というように他の事象と関係づけて、なにになにだからなにになに、という説明は少ない。したがって藩閥政治や、国会開設のように因果関連もしくは目的関連を説明しなければならなくなると、関係があると判断する者が多いがその理由は、今日学んだからというような理由になってくる場合が多い。

ウ. Cは、だれがどんなことをしたか、という程度のことは1回目の学習前に一応予想として書き、その他の原因となっている事象まで考える意識はもっているが、前述のように前に学習した事象は前の時代だから関係がないと関係のないほうに反応を変えた生徒の意識を示しているものである。徴兵令や地租改正を施行したのは明治6年で民選議院設立の意見書を提出したのは明治7年で近接しているが、学習の主題が異なり前に学習した事象になると非常に前のように考えて関係のないものとする生徒の意識があらわれているタイプである。第2校時の学習を通して関係があると判断するようになるが、その理由は士族が藩閥政治に関係があるから俸祿の処分も関係があるだろうというような程度でじゅうぶん理解したものはいわれない。このように前の時代だから関係がないと考えて、さらに関係のないほうに反応をかえ、学習を通してまた反応を変えようという生徒は上位群の中にも5名ほどいる。上中位群について面接で聞いてみると地租改正、俸祿の処分など理解していても、時代が前だからあまり関係がないと思ったと答えた者もいることからみても年表使用の重要性をつくづく感じさせられる。この点は日露戦争でも同様で2図にみられるごとく三国干渉や世界の強国のアジア進出などを関係づけようとする傾向が少なく、しかも上中下位群にその傾向の相違があまりない。

エ. Dのタイプは自由民権運動を広く他の事象と関係づけ広い視野で考察しようとする理解のわく組の柔軟なタイプである。もちろん上位群であり学習能力の高い生徒であるがこのようなタイプは上位群に多いのは当然であるが中位群にも少しではあるがみられる。Cのタイプとして例示したのも上位群であるが、上位群の中でもテストになるとよく暗記してきてよい点数をとるが必ずしも歴史的に思考する態度を身につけているとは限らない。

(3) 上中下位群の理解傾向の相違

歴史認識を深める態度形成上の問題点を把握するため、これまで検討してきたことを上中下位群の理解傾向の相違という観点から検討してみることにする。

① 関係づけようとした歴史事象からみた相違 (1図=14ページ 2図=16ページ参照)

ア. 学習前において板垣退助、自由平等の思想、自由党、国会の開設など既有知識やことばの意味から遠想的に関係づけようとする傾向は程度の差はあるとしても同一の傾向である。日露戦争におけるロシアの南下政策、日本海海戦、世界の強国のアジア進出なども同様である。

イ. 学習を通して経過や結果を示す表面にあらわれる事象、たとえば立志社とか国会期成同盟、民選

議院設立意見書、日露戦争における講和条約に関する人物、名称、領土などを関係づけようとする傾向も程度の差はあるとしてもその傾向には変わりがない。

ウ．原因となる事象や時代的背景となる事象についてみると、日露戦争では義和団事件をのぞいて共通の傾向を示し、自由民権運動においては、地租改正、徴兵令、俸祿の処分などについては上位群と中、下位群にはかなり大きな差がみられる。例えば地租改正を例にとってみると次のようになる。

3表 地租改正 (関係あり=+2 少しある=+1 わからない・どちらでもない=0, だいたい関係がない=-1 関係がない=-2とする)

回数	上位群 (30)					中位群 (40)					下位群 (30)				
	+2	+1	0	-1	-2	+2	+1	0	-1	-2	+2	+1	0	-1	-2
1	1	5	7	2	15	0	10	8	5	17	2	8	8	6	6
2	1	3	7	2	17	0	6	8	5	21	3	7	8	7	5
3	18	3	0	2	7	7	12	5	2	14	5	7	6	6	6
4	21	3	0	0	6	11	14	4	2	9	5	7	5	6	7

上位群は学習を通して関係があるという方向に変化するが、中位群はその変化が少なく最初に関係がない。どちらでもない、わからないと反応して、その後変化が少なく、下位群にいたってはその変化が非常に少ない。下位群は学習前に反応してからはほとんど、このような事象に対して考慮されていないといってよかろう。下位群にとっては難解であるから、むしろだれが何をしたという程度のことをしっかりと握らせることが重要であろう。しかし、理解力があればこれらの事象を関係づけて考察しようとするかということとは別の問題であることは前に述べた。

エ．下位群の特色ある傾向として関係のない事象を学習の進展に応じて関係づけようとしたり、関係があるとした誤った判断が訂正されない傾向がある。

たとえば、自由民権運動における日清戦争や東海道本線を例にとると次のようになる。

4表 東海道本線の開通

回数	東海道本線の開通					計	日清戦争						
	+2	+1	0	-1	-2		回数	+2	+1	0	-1	-2	計
1	7	3	10	4	6	30	1	1	7	12	8	2	30
2	6	4	7	4	9	30	2	2	6	11	7	4	30
3	6	4	6	3	11	30	3	4	4	10	9	3	30
4	4	3	6	4	13	30	4	4	3	7	7	9	30

この点を面接で聞いてみると自由民権運動と日清戦争の場合「先生が年表を開きなさいと言ったので年表を開いたら、そこに出ていたから関係があると思った。」と答えた。

下位群はいっばいで説明を受け入れて概念の内包をじゅうじつしてゆけない反面、何か印象に残っていることはなんでも関係づけようとする傾向をもっている。

② 関係があると判断した理由からみた相違

ア．自由民権運動について関係があると判断した原因なり、経過、結果、影響として記述されている場合を正しいとして区別して示すと3図のようになる。理由を正しく記述できる者が中下位群ほど

少なく、特に中位群と下位群の間には大きな差がある。そのわけは前に例示したごとく、なんとなくかきょう学んだから、というような理由が下位群には多いからである。このような理由しか書けないということは理解力だけでなく下位群の思考傾向として次のような特色があるといえよう。

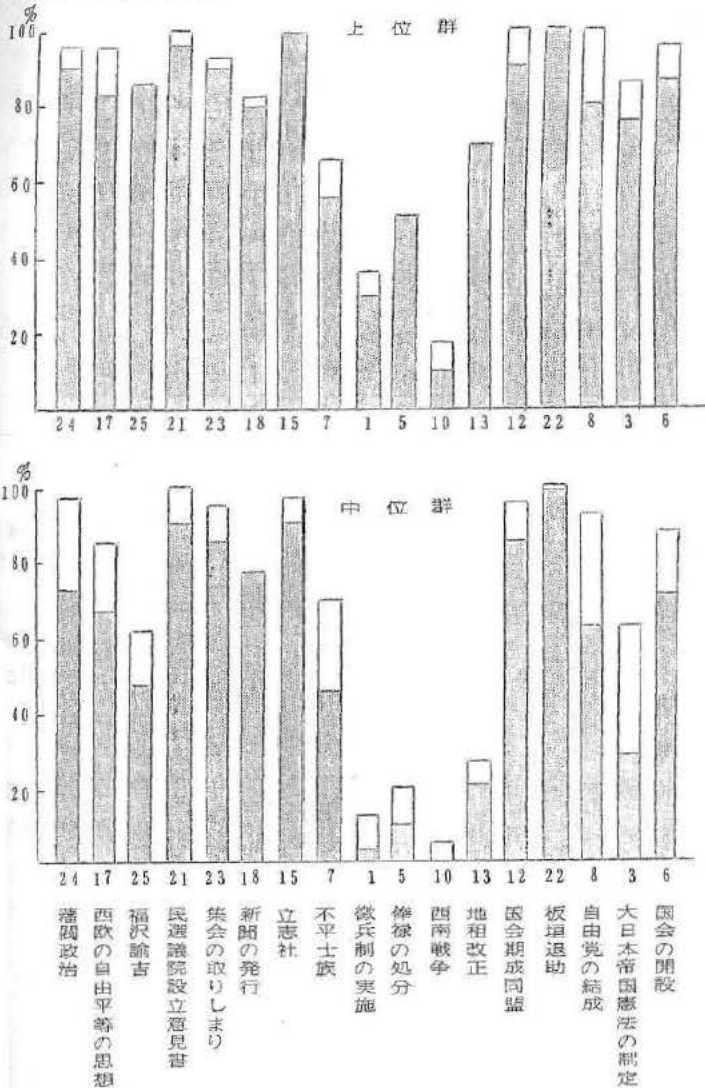
・ とぼとして断片的に受け入れるが、意味を考えようとしない。

なんとなくという理由を書いた生徒に面接で聞いてみると「たしかに関係があるということはわかるが、その理由と聞かれるとどう書けばよいかわからない。」と答えた。「しかし、関係があると考えただから何か理由があるのでしょうか。」と聞くと、しばらく考えた後、「先生の書いた黒板の字の中にあった。」と答えた。このように脈絡がつかずぼつんぼつんと断片的にしか情報を受け入れていない。思考するということがないわけである。

このような傾向は、中位群にもかなりあるので、前のBのタイプに属する事例として、M. S. のものを次頁にあげてみた。

3 図 自由民権運動

理由の正しいもの

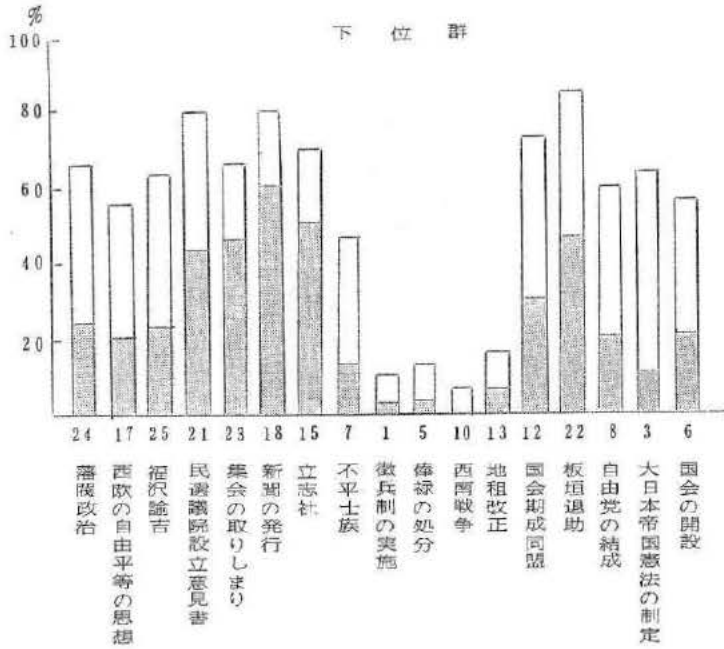


イ. 前に例示したBのタイプのだけれが、どんな政治結社をつくり、なにをしたか、というような表面的にとらえやすい事象についてはその理由も上中下位群ともに正しい傾向はひとしい。

しかし、その理由は前のBのタイプやM. S. にみられるように単純なとらえ方をしている。また細かく検討すると、福沢諭吉=自由民権運動を考え出した人というように適確なとらえ方をしていない。

ウ. 意味をとらえようとしない思考傾向のあらわれのひとつであるが印象強く残っていることが強く銘記され、それがなまのままにでてくる場合が多い。

たとえば、M. S. の



記述にもみられるように、集会の取りしまり＝3人以上集まって運動の話をするとき国会に申し出る、というような理由が中位群や下位群にかなりみられる。

他の例をあげると。集会をするときは警察に言ってからやる。

M・S (女) 中位群 知能偏差値52

1 回 目	2 回 目	3 回 目	4 回 目
〔大日本帝国憲法の制定〕 3. 考えにあっているから	〔大日本帝国憲法の制定〕 3. 今日学んだから	〔国会期成同盟〕 1. 2. 自由民権運動によって最後に結成したもの	〔不平士族〕 7. 政府の専制的なやり方に不満をもつ人が自由民権運動に加わったから
〔東海道本線の開通〕 4. 自由にどこへでもいけるから	〔国会の開設〕 6. 今日学んだから	〔立志社〕 1. 5. 自由民権運動によって初めてできたもの	〔自由党の結成〕 8. 政府が国会の開設を約束したから民権がわでこれを作ったから
〔自由党の結成〕 8. これをしなかったら自由民権運動なんかできないから	〔民選議院設立の意見書〕 2. 1. 意見書がでなかったら自由民権運動がおこらなかったから	〔集会の取りしまり〕 2. 3. 今日学んだから	〔集会の取りしまり〕 2. 3. 民権がわで3人以上で話し合う時国会にもうしでなければならぬ
〔学制の制定〕 1. 4. 考えにあっているから	〔板垣退助〕 2. 2. 中心人物だから		
〔太陽暦の採用〕 1. 6. 考えにあっているから	〔藩閥政治〕 2. 4. 今日学んだから		
〔西欧の自由平等の思想〕 1. 7. 考えにあっているから	〔福沢諭吉〕 2. 5. 自由民権運動を考え出した人		
〔新聞の発行〕 1. 8. 自由に他のことを知ることが出来るから	(かんちがいをしていたことがわかったから) 4, 14, 16, 18		

それをいわないと1年から3年豚箱にいられる。

○国会期成同盟については ○会を開くといっぺんに13万人の人がふえた。

○福沢諭吉については ○天は人の上に人を作らず人の下に人を作らずと言った。

などでいづれも印象強く残っていることはばであるが、自由民権運動とどうい関係があるか考えずただばくぜんと話を聞いている態度がうかがわれる。

エ. いっせい指導の中で下位群や中位群の一部は学習する構えが乏しく、ただばくぜんと先生の話の聞いている。

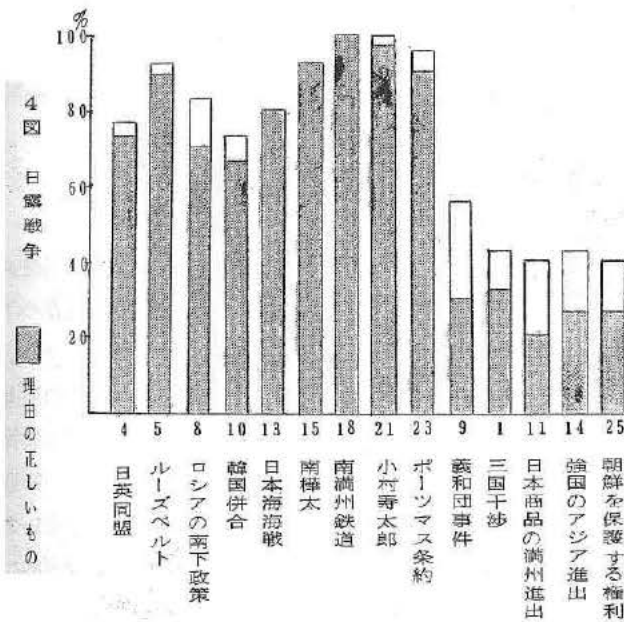
事例としてあげた20ページのAにみられるように印象に残っていることをぼつんぼつんと書いているが、情報を受け入れる量も少なく、その上先生がいったから、とか教科書にあったという理由が多い。M、Sも第2校時の学習結果には獲得した知識が少ない傾向を示しているが、このことは情報を受け入れて、関係がないと判断した自分の考えを修正し、新しく知識を再編成してゆけないという点においては思考が固い⁽¹³⁾、ということがあるとともに、学習に参加する意欲が観察や面接などを通して非常に低いことがみ受けられる。いっせい指導の中で下位群や中位群の一部に思考させる場面を作ってゆくことがどうしても必要である。

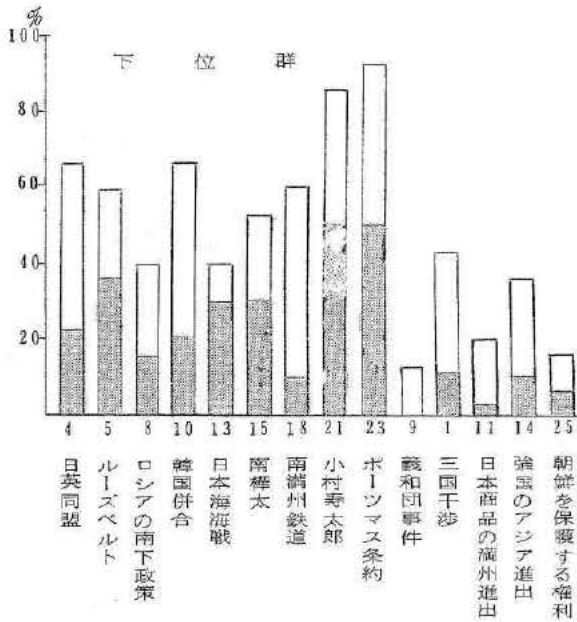
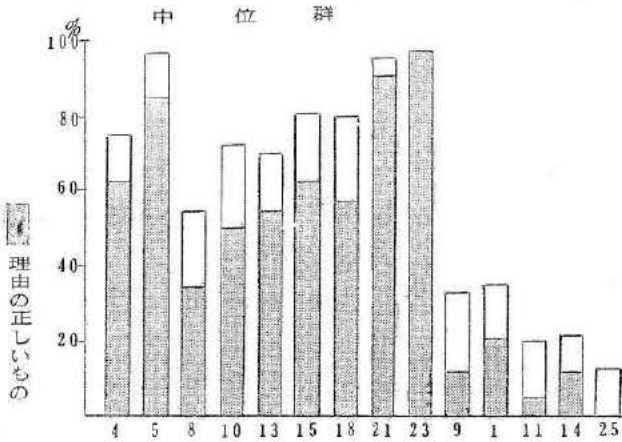
ここであげたM、Sや前掲のタイプの生徒が学習を終わってどのような考え方や見方をもつにいたったかは最後の節で検討することにする。

なお、イメージ形成との関係もあるので、日露戦争についても、関係があると判断した理由の適否についての結果を示すと次ページのようになる。

日露戦争についても自由民権運動と同様に、だれの仲裁によって、どんな条約が、だれが代表で、どんなことが決められたか、というような事象、人物については、その理由もまた正しく記述した者が多い。それに対して原因となる事象はロシアの南下政策は上位群は比較的ましく書いた者が多いけれども中下位群になると少なくなり、義和団事件や、三国干渉、強国のアジア進出など激減する。この学習は、前にも述べたごとく、日露戦争を直接主題にした学習は1時間であること、自由民権運動のときのように、学校放送など使わず印象を強める指導上のくふうは少なかった。日英同盟が比較的ましく書いた者が多いのは、日露戦争というテーマの時間に直接取り扱ったということが強く影響していると思う。日露戦争が日本の大陸への発展と、世界の国々の

上位群





アジア進出 — ロシアの南下政策 — 義和団事件 — 戦争 — 韓国併合という歴史の流れの中に位置づけようとしなくて、事象を断片的にとらえるから、その事象が関係あるとわかって、自由民権運動の場合と同じように、なんとなく、教科書にあったから、先生が説明したから、という理由が多くなるわけである。

また、上、中、下位群の順に理由を正しく書く者が少なくなることも自由民権運動の場合と同様で、下位群になるほどことばとして受け入れても意味としてとれないから黒板の字の中にあつた、先生がいった、という理由になってくる。ただ、ここでは学習前に日露戦争という表現から、ことばの意味を媒介にして連想するということは自由民権運動の場合ほどはっきりした傾向は見られなかった。

以上、概念形成において事象を関係づけようとする思考傾向をみると学習前では既有知識、生活経験による類推のほか概念を示すことばから、自由、平等、政治という意味を媒介にして連想的に結びつけようとする傾向もみられる。そして学習を通して生徒が関係づけようとする事象は自由民権運動では、だれが、どんな政治結社をつくり、どうした、とか、講和条約に関係する人物、領土、名称などの表面的なとらえやすい歴史事象が多く、また関係づけようとした理由も正しい。その反面、民権運動に影響を及ぼしている時代的背景となる事象や、戦争の背景となっている列強の進出や、それと日本との関係に関する事象を関係づけようとしないう傾向がある。このような関係は複雑で生徒が理解しにくいということもあるが、生徒が表面に出てくる事象を強く意識し、その原因となっていて、しかも前に学習した事象を広く関係づけ、因果の連鎖としての歴史の流れに位置づけて考えようとする思考の構えが乏しいということは指摘できよう。また日露戦争のように、ある小单元の中で一時間で指導するような場合、

その前、後に学習した、主題の異なった内容として取り扱われた事象を関係づけようとしないう傾向も共通した思考傾向であろう。このような傾向の根底には、生徒が歴史学習を要約した項目的知識として記憶しておこうとする構えが強いことや、学習場面においてそのような関係を意欲的に考察する態度が不じゅうぶんであるといえる。

また、上中下位群別に検討すると関係づけようとする事象は、程度の差はあるが上中下位群は同一の傾向がある。しかし、下位群は学習を通して関係がないと思つた事象を関係ありと考える意味の転換が容易でなく、また複雑な関係になるほど、その傾向が強くなる。さらに関係があると判断してもその理由が、なんとなく、とか今日学んだから、というような理由や、理由にならないような印象に、強く残っていることを書く者が多い。ことばとして受け入れても意味としてとらえようとしないう。そして、その根底に学習に参加する構えが乏しく、ただばくぜんと先生の話の聞いている態度がみられる。

いっせい指導の中で、中位群の一部や下位群に積極的に思考させる場をどのように作つてゆくかが問題である。

また、学校放送は生徒に印象強く受けとめられているが、イメージ形成にどのような影響を与えているかはこれから検討したい。

3 歴史事象に対するイメージ形成の傾向 — 感じ方の問題 —

これまで歴史的概概念形成過程における理解傾向から歴史認識を深める上での態度形成上の問題点を考察してきたわけであるがここでは、それと深い関係をもつ歴史事象に対する感じ方の傾向をイメージ調査の結果を通して考察することにする。

(2) 自由民権運動

研究方法で述べた仮説 ② についてのイメージ調査の結果は、それぞれの尺度の反応に対して右よりたいへん=+2 すこし=+1 どちらでもない=0 すこし=-1 たいへん=-2の得点を与え調査回数毎、尺度毎に平均値をだすと5表のようになる。

5 表 自由民権運動

対	調査回数			
	1	2	3	4
1. この運動はただし — まちがった運動だ	1.16	1.42	1.67	1.70
2. 自由に運動ができた — 束縛された運動であった	-0.86	-0.97	-1.19	-1.26
3. この運動は活動的だ — この運動は不活発だ	0.85	1.00	1.38	1.44
4. この運動の行なわれた範囲は広い — せまい	0.17	0.46	1.62	1.74
5. この運動の影響は大きい — 影響は小さい	1.15	1.43	1.67	1.78
6. この運動は一貫している — この運動はむじゅんしている	0.22	0.26	0.61	0.65
7. この運動はたやすくできた — この運動はむずかしかった	-0.90	-1.09	-1.20	-1.29
8. この運動は積極的だ — この運動は消極的だ	0.92	1.00	1.19	1.65
9. この運動の考えは深い — 考えがあさい	0.74	0.98	1.19	1.23
10. この運動は安全にできた — 危険であった	-0.92	-0.92	-1.24	-1.27

1 1 . 運動の方向が新しい— 運動の方向が古い	0.8 9	1.1 4	1.3 7	1.4 3
1 2 . 純粋な運動であった— 不純な運動であった	0.2 3	0.3 4	0.3 2	0.4 3
1 3 . このような運動はすぎだ— このような運動はきらいだ	0.5 8	0.7 8	0.8 8	0.8 6
1 4 . この運動の考えはするどい— 考えはにぶい	0.6 7	0.9 0	1.1 0	1.2 2
1 5 . この運動はよい— この運動は悪い	1.2 1	1.4 8	1.5 8	1.6 8

以上の対の中で1と15、9と14、2と7、10は意味を、ほぼ同じように受けとって同じような反応を示しているので、プロフィール作成にあつては、7、10、14、15を省略することにした。また一の反応を示している対については、右と左を逆にして、プロフィールが中央(0)から左側におさまるようにして示したのが5図のプロフィールである。以下、このプロフィールからイメージ形成上の問題点を考察したい。

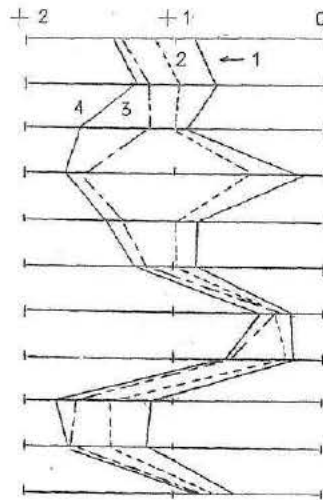
- ① 反応がかたよった左側の判断を見ると生徒が学習前から自由民権運動に対するイメージは好意的であり美化されている。

学習前における反応はすべての対について、好意的、肯定的な意見の方向に反応し、特に正しいとか影響は大きいという判断に対する肯定が強い。しかし、考えが深い、純粋、一貫しているという方向への反応は、認識に基づいた反応でなく自由民権ならすべてよからうという一種のステレオタイプを示しているということができよう。そしてこのような反応傾向の理由としては、前の節で検討したごとく自由民権運動という刺激に対して、自由、平等、政治、国会などの意味が媒介過程に働いていたことが既有知識と相まって学習前のイメージに影響し、新しい方向で考えが深く、積極的に、広い範囲で、活動的に 純粋に 一貫して行なわれ、正しく 好きだという方向のイメージをもったといえよう。

- ② 学習後のイメージ形成を見るとますます学習前の反応傾向が強まるが、特に現象的にとらえやすかった事象に関係ある対(ついで)については大きく変化し、運動の性格に関係する対の変化は少なく自由民権運動に対する認識の傾向を示している。

5 図

- 1 1 . 運動の方向が新しい
- 9 . この運動の考えは深い
- 8 . この運動は積極的だ
- 4 . この運動の行なわれた範囲は広い
- 3 . この運動は活動的だ
- 2 . 束縛された運動であった
- 1 2 . 純粋な運動であった
- 6 . この運動は一貫している
- 5 . 運動の影響は大きい
- 1 . この運動はただしい
- 1 3 . このような運動はすぎだ



- 運動の方向が古い
- この運動の考えはあさい
- この運動は消極的だ
- 運動の行なわれた範囲はせまい
- この運動は不活動だ
- 自由に運動ができた
- 不純な運動であった
- この運動はむじゅんしている
- この運動の影響は小さい
- まちがった運動だ
- このような運動はきらいだ

学習後の変化をみると学習前の肯定的、好意的な反応傾向はますます強まるが、その内容を検討す

ると比較的变化の多い意見は積極的な活動、運動の行なわれた範囲、活動的な運動、影響などに関するもので、12の純粹な運動、この運動は好きだは²検定ではともに有意の差がない。したがって生徒が学習を通して事象を関係づけようとした傾向と深い関係をもっているといえよう。すなわち現象としてとらえやすい歴史事象に関する対についてはイメージが最も変化したことになる。そしてこの原因としては、生徒の認識の状態と学校放送でドラマふう構成した運動の起こり、意見書の内容、運動の発展と政府の弾圧、影響などが影響していると考えられる。

反面、純粹な、一貫した、という対に対する反応があまり変わらないのは、一つは純粹とか一貫したということばに生徒が抵抗を感じたこと、前の節で検討した、俸祿の処分、地租改正、徴兵制などの関係に対する理解の不じゅうぶんから運動の性格に対する感じ方が浅かったということも影響していると思われる。しかし、個人的に検討すると非常に柔軟な考え方をしている生徒もいて、12の純粹、不純の対に対しては、不純な方向へ反応を変えて「参加した人の中には新しい政府の政治のやり方に不満をもつだけで反対運動した人も多いからいちがいに純粹とはいわれない。」とか、6の一貫しているに対して「最後に乱暴したり、分裂したから一貫しているとはいわれない。」という意見で反応を変えた生徒もいた。このような生徒はごく少数で大部分の生徒は学習前の反応を変えないか、変えた者も理由を見ると自由を願って運動したからというような理由で反応を変えているわけである。全体を通しての反応傾向を悪いということとはできない。しかし、既有知識とともに自由、平等というある価値をもつことばの意味が、自由民権運動の場合は強く働いて、よくわからないが、なんでもよいのだらうという一種のステレオタイプがあり、学習を通しては現象としてとらえやすいものが大きく変化するという傾向を示し、また学校放送の影響が大きいということも指摘できよう。このような点からテレビなどの影響を受けている歴史事象（たとえば、豊臣秀吉）は逆にまた一種の先入観によるステレオタイプが形成されやすいということもいわれるし、また学校放送は性格上、ドラマふう構成され、ある一面が強調されやすいから、その強調された側面に基づくイメージが形成されやすいことをじゅうぶん注意する必要がある。また先入観に対しては概念くだきとか、引っくり返し⁽¹⁴⁾といわれるように前の認識を構造的に再編成してゆく指導上の配慮が必要である。

- ③ 学習の発展に応じて著しく変化した理由を検討すると生徒の感じ方にはことばのもつ情緒的、具体的な表現が非常に影響している。

5図のプロフィールを検討すると、4、運動の行なわれた範囲が広いとか 8、積極的な運動だ、などが大きく変化している。4の運動の範囲が広いは特に2回目から3回目の間に大きな差があるので、3回目の調査から、そのように感じた理由を検討すると6表ようになる。

6表 (3回目) 運動の行なわれた範囲は広いと感じた理由

理 由	上位群	中位群	下位群	計
○北は北海道から南は九州まで広まった	7	12	9	28
○全国的に広まったから	5	13	4	22
○貧農、女性、不平等士族が参加したから	2	1	1	4
計	14	26	14	54

全国的に広まったという理由も“北は北海道から南は九州まで広まった。”という表現の影響によると

いえよう。この表現は第2校時における学校放送で、またその後で教師が取り上げた表現である。この表現は、この対の他に「3、この運動は活動的だ、5、この運動の影響は大きい」などを感じた理由にもなっている。* 北は北海道から南は九州まで。という表現は単に全国的に広まったという程度の表現なら、このような結果は生まれなかったであろう。この表現には広まったということを感じさせる具体性とスローガンのなびびきをもっている。

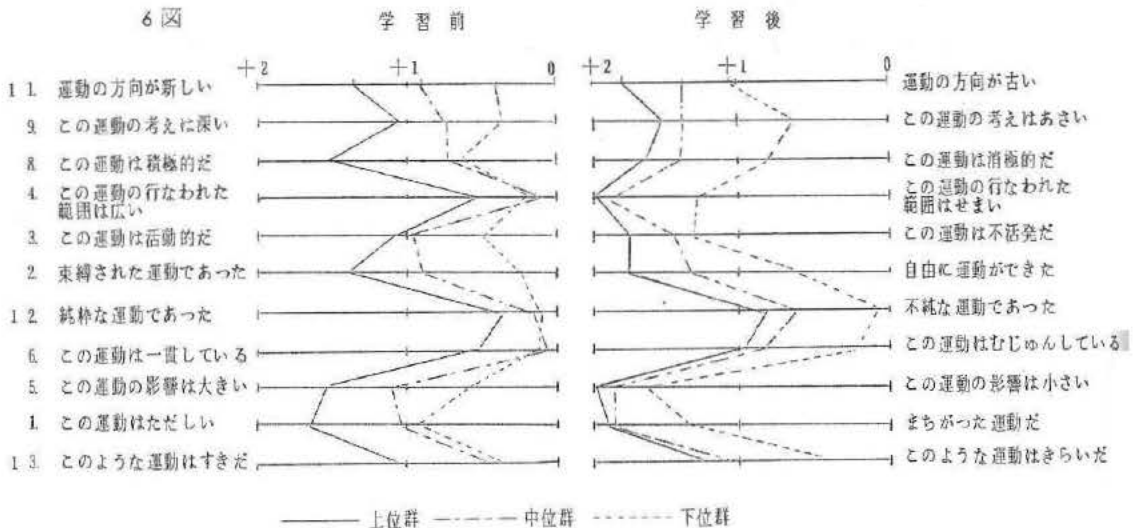
今一つ例をあげてみると、やはり学校放送にて、また教師が取り上げた表現に「運動の記事を正しいとして書いたり、無届に集会を開くと〇年間、豚箱にぶち込まれた。」という表現があった。この豚箱にぶち込まれた、という表現が生徒のイメージに影響し、7表のように各対の尺度に対する反応を変えた理由となっている。

7表

プロフィールの対の番号	1	2	3	8	9	12	計
「豚箱にぶち込まれた」という理由で反応を変えた者	2	14	6	4	1	2	29

つまり、豚箱にぶち込まれても運動をしたから、正しいし、束縛されていたし、活動的だということになる。このようにある表現の印象が強いとそれがいろいろな次元のイメージ形成に影響を与えることが見られるからコミュニケーションにおける教師の表現は、知識、理解だけでなく異なった次元のイメージにも影響を与え、ひいてはその事象に対する見方、考え方に影響しているといえる。

- ③ 学習前と学習後のイメージプロフィールを上、中、下位群毎に分けてみると6図のようになり、その変化を見ると8表のようになり、それぞれ異なった反応の傾向が見られる。



ア. 上位群は学習前から強く+の方向に反応し、下位群ほど、反応が弱い。

このことは、上位群は下位群より既有知識を多くもっていること、また学習前では、自由とか平等とか国会ということばを媒介にして連想的に思考する者が上位群が比較的多いという理由からくるものであろう。そして学習を通して中位群もほぼ上位群と同様のイメージになってくる点を考えるとその方向は必ずしもまちがいはいわれず、だれもが形成しやすいイメージのタイプであったといえる。しかし、わずかな既有知識で、考えが深いとか、正しい好きだ、という方向に最初から反応することは、前にも述べたごとく、自由とか平等という価値的なことばに媒介されて、ある先入観をもったり、型にはまった考え方を先走ってするような危険性を上位群はもつといえよう。上位群の中にも、個人的には、最初にわからない、とほぼ中央に反応し、学習を通して変わってくる生徒がいるがこの場合は比較的そういう生徒は少なかった。

8表 学習前と学習後(4回目)における平均値の差

左側の対のみ(要約)	上位群	中位群	下位群	左側の対のみ	上位群	中位群	下位群
11. 方向が新しい	0.44	0.50	0.66	12. 純粋な	0.04	0.40	0.03
9. 考えが深い	0.50	0.70	0.20	6. 一貫している	0.27	0.07	0.13
8. 積極的だ	0.13	0.70	0.20	5. 影響は大きい	0.47	0.60	1.03
4. 運動の範囲が広い	1.46	1.80	1.04	1. ただしい	0.30	0.60	0.40
3. 活動的だ	0.70	0.52	0.84	13. 好きだ	0.07	0.60	0.06
2. 束縛された	0.40	0.48	0.30				

イ. 学習を通しての変化を8表によりみると、上位群は学習前から強く+の方向に反応しているから、その変化の差は少なくなるが中位群が非常に変化し、下位群は中位群に比べて感じ方もにぶい。しかし下位群は、活動的である、影響が大きいという対に対しては非常に変化している。これらは、政府の弾圧とか、新聞、演説会などの活動が、学校放送や教師の説明により印象づけられたからであろう。この学習を通して、最も変化しているのは中位群であるが、結果としてプロフィールに見られるように上位群と似たイメージになっているわけである。これらの結果を通して、イメージ形成とか感じ方というもの、1図、3図と比較すると情報を受け入れ知識を増加しにくいことと非常に深い関係をもっているといえよう。

(2) 日露戦争

これを自由民権運動の場合と同様に処理すると、各対に対する反応の平均値は9表のようになる。

9表 尺度の対	学習前	学習後
1. この戦争はただしい — この戦争はまちがっている	-0.26	-0.27
2. 長い戦争であった — 短い戦争であった	-0.10	0.90
3. そのころの日本の大陸進出ははげしい — 日本の大陸進出はおだやかだ	0.68	0.74
4. 戦争の影響は大きい — 戦争の影響は小さい	0.93	1.33
5. 戦争の結果をうれしく思う — 戦争の結果を悲しく思う	0.10	0.10
6. この戦争は日本が積極的におこした — やむをえず行なった戦争だ	0.31	0.17

7. 日本は強い — 日本は弱い	0.76	0.83
8. この戦争はよい — この戦争は悪い	-0.27	-0.27
9. 勝つことのでかっていた安全な戦争だ — 勝敗のわからない危険な戦争だった	-0.57	-1.07
10. 戦争の範囲は広い — 戦争の範囲はせまい	0.17	-0.08
11. 戦争の原因は複雑だ — 戦争の原因は単純だ	0.12	0.02
12. この戦争はきらいだ — この戦争はすきだ	0.61	0.65

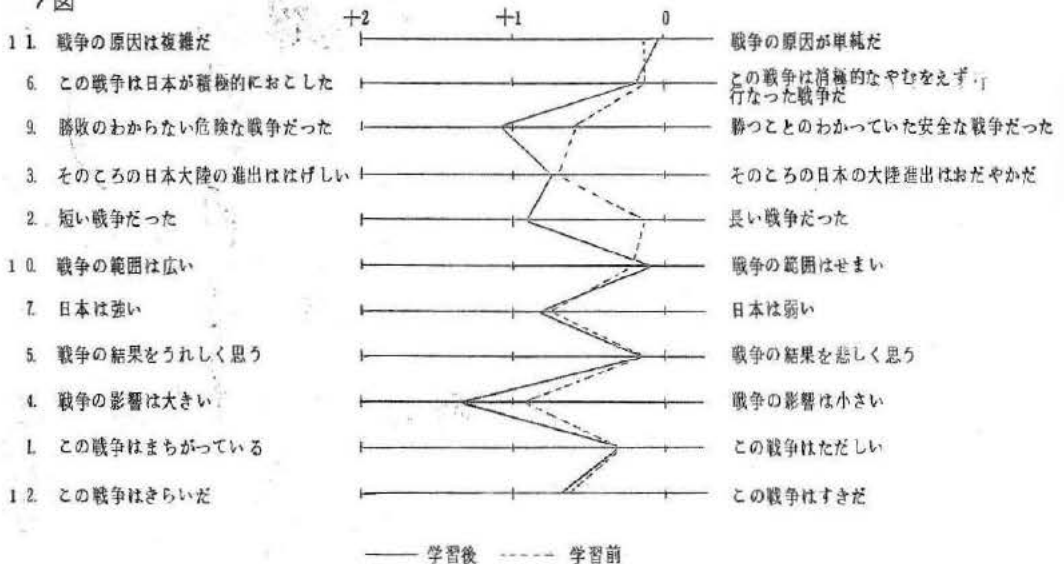
以上の対のうち、1, 8が同じような意味に受けとられているので、8をはずし、反応を全部左にかたよるように対を逆にしてプロフィールをえがくと7図のようなになる。この図を通して考察すると、

①. 学習前においては、自由民権運動のように好意的、肯定的の方向に共通に反応せず戦争ということはを媒介にして影響の大きさを認めながらも否定的なイメージである。その傾向は日本の大陸進出がはげしく、勝敗のわからない危険な戦争をおこし、日本は強くその影響は大きい、ややまちがっており、きらいだというイメージである。しかも日露戦争という概念は複雑なので、自由民権運動のように共通に一定の方向へ反応せず、反応方向が3ページの10表のようにわかる。

学習後の変化をみると、自由民権運動のようにだんだん学習を通して美化されたイメージにならず変化が少ない。このプロフィールでは、 χ^2 検定により有意の差をもって反応分布が変化しているのは9の勝敗のわからない危険な戦争であった。2の短い戦争であった、4の戦争の影響は大きいという尺度だけである。

戦争の影響が大きいという方向への変化は、2図における、講和条約に関する事象を結びつけようとする傾向と関係があるといえよう。(これ以外の影響もあるが、後述)戦争の期間に関しては、知識的なもので学習の影響があり、勝敗のわからない危険な戦争だった、ということも、戦争遂行における日本の軍勢力、経済力の苦しさなどの情報がある程度理解されたからということが考えられる。

7 図



ア. このように変化しない理由を考察すると、10表のように、賛否、好悪両方の意見で相殺される

上、どちらでもない、という反応も多い。自由民権運動と異なってイメージの方向がわかれるところにこのような事象に対する感じ方の複雑さがあるといえよう。

10表 各対に対する反応の分布

右の対(要約)	学 習 前 (100)					学 習 後 (100)					左の対(要約)
	+2	+1	0	-1	-2	+2	+1	0	-1	-2	
1. まちがっている	12	8	74	6	0	12	29	38	16	5	ただしい
5. うれしく思う	8	15	56	10	11	17	28	25	15	15	悲しく思う
6. 積極的に	7	33	47	10	3	16	32	23	12	17	消極的に
11. 原因は複雑	6	16	66	8	4	10	32	20	26	12	原因は単純だ
12. きらいだ	29	14	49	5	3	28	25	37	7	3	すきだ
4. 影響は大きい	29	36	34	1	0	48	39	11	2	0	影響は小さい

そして この相反する二つの方向は、日露戦争に対する評価的な意味をもつ対については、勝利の結果という点から肯定的に見ようとする者と、被害という点から否定的に見ようとする異なった見方がある。たとえば、5. 戦争の結果をうれしく思う、悲しく思うの反応の理由を見ると次のように分かれる。(この対を印象に強く残っているとして選んで理由を書いた者は21名である)

- 結果をうれしく思う
 - 理由 {
 - ・ロシアに勝ったのがうれしい 7
 - ・勝って領土が増えたのがうれしい 2
- 結果を悲しく思う
 - 理由 {
 - ・多くの人が死んだり金がかかったので 9
 - ・戦場になった国を思うと 3

この二つの異なった考え方は、結果として同じ方向に反応している場合もある。たとえば10表の4この戦争の影響は大きい、は十の方向にかたよった反応であるがその理由を見ると(この対の反応の理由を書いたものは24名)

- 4. 戦争の影響は大きい
 - 理由 {
 - ・戦争の結果、勝って日本が発展したので 18
 - ・戦争に多くの金を使ったり多くの人が死んだので 6

イ. 学習を通してイメージの変化が少ない理由は、自由民権運動の場合に比べて視聴覚にうったえる指導形態をとらなかったことも影響しているといえる。

② 自由民権運動の場合と同じく日露戦争を広く時代の流れに位置づけてとらえようとしな思考傾向は、イメージ形成にも影響している。

前の節の2図、3図を通しての考察で述べたごとく、日露戦争という刺激に対して戦争の原因となる国々の動きを示す事象を関係づけようとする傾向は少なかったのであるが、このような思考傾向が影響して、複雑な戦争の原因が、中間に反応し学習を通して「単純な」という方向にかたよったことである。もちろん有意な差はないけれども、学習後における、どちらでもないに反応した生徒も含めて58名の生徒は、複雑だというイメージをもちえなかったことは問題である。そして、こういうことが戦争というものを、歴史的、科学的に認識せず、戦死者が多いから悪い、勝って日本が発展したからよいという受けとめ方しかできなかったとすれば、歴史の受けとめ方に問題があろう。歴史を通して学ぶべきことは、「なるほどこの時代では、このような原因で戦争があったのか、」という事象

の因果の關係の考察を通して戦争に対する科学的な見方を養うことがたいせつである。

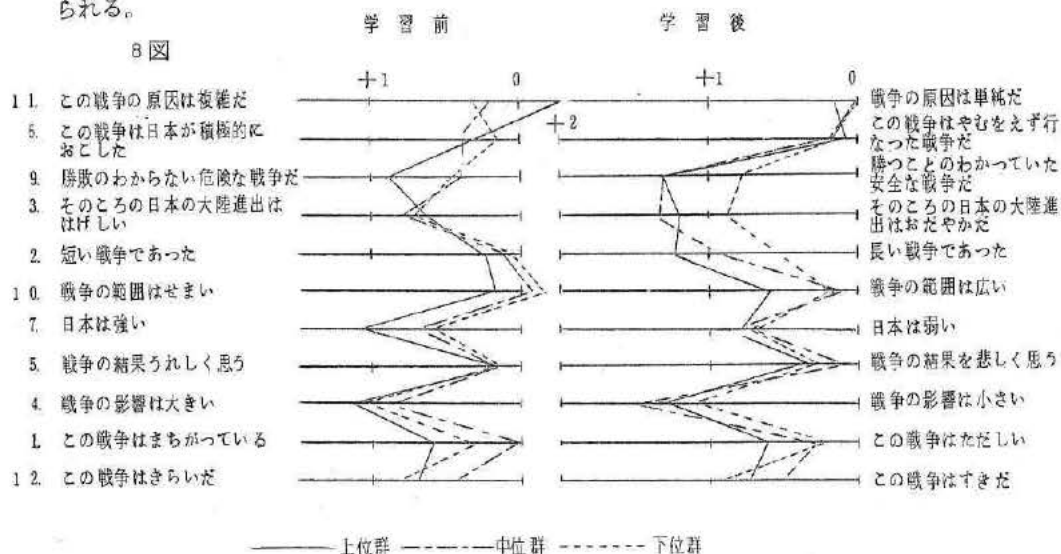
- ③ 自由民権運動と同じく、ここでも具体性のある、情緒的なひびきをもつことはがイメージ形成に影響している。この調査では、研究方法で述べたごとく、学習後、最も印象に残っている対を一つ選んで、その反応の理由を書かせたのであるが、無記を除いて、書いたものが97名、その理由はすでに例示したごとくいろいろな生徒の考え方を示しているが、その中で最も多い理由は「多くの戦死者と金を使ったから」である。それが各対の反応の理由となっている状態を示すと次のようになる。

対の番号	1	2	4	5	7	8	11	12	計
多くの戦死者と金を使ったからという理由	1	1	6	9	1	1	1	8	28

そして、この理由は、教師が資料プリントで日本とロシアの戦死者、戦傷者の統計を示して「日本の戦死者は、ロシアの約2倍である」という説明をしたこと、戦費をプリントで説明した上「この費用は当時の日本の1年間に使用する費用の20倍であり、たった1年ちよつとの戦争に約20年間に使うお金を使用した」という説明である。このような具体的な、情報量の大きい説明は、印象深くとらえられ、ここでは、日露戦争に対する否定的イメージの形成に影響しているわけである。

- ④ 上、中、下位群にわけて、学習前後のプロファイルを書いてみると8図のようになる。

ア、学習前においては下位群、中位群はほぼ同様のイメージで、上位群が、自由民権運動ほど明瞭ではないが異なった反応傾向が見られる。特に戦争の原因が単純で、勝敗のわからない危険な戦争をおこし、日本は強く、この戦争はまちがっているなどの対である。既有知識とともに自由民権運動で述べたごとく、戦争ということばを媒介にして先走った判断をし、割り切つてとらえようとする危険な傾向が、原因は単純だ、まちがっている、という対に、他に比べて強く反応するところに見られる。



イ、学習を通しての変化を見ると 8 図および 11 表のようになり自由民権運動のように明瞭ではないが、上、中、下位群の感じ方の相違がみられる。

11表 学習前と学習後における平均値の差

左側の対のみ(要約)	上位群	中位群	下位群	左側の対のみ(要約)	上位群	中位群	下位群
11. 原因は複雑だ	0.36	-0.22	-0.33	9. 危険な戦争だ	0.44	0.88	0.37
6. 積極的に起こした	-0.16	-0.23	0.03	3. 大陸進出がはげしい	0.44	0.52	0.20
2. 短い戦争だ	1.00	0.77	0.43	4. 影響は大きい	0.20	0.55	0.07
10. 範囲はせまい	0.32	-0.02	-0.03	1. まちがっている	-0.04	0.15	-0.13
7. 日本は強い	-0.30	0.23	0.24	12. きれいだ	0	0.05	0.07
5. うれしく思う	0.10	0.05	0.03				

学習を通しての変化は上位群は戦争の原因を複雑だ、という方向に、また当時の軍事力、経済力から弱いという方向に、より深い感じ方をしているといえよう。中位群は勝敗のわからない危険な戦争だった、影響が大きいなどやや現象的なものはより多く変化している。下位群は全般的に変化が少ない。上位群が戦争の範囲がせまい、というのは、主な戦場が南満州というところから強く感じたのであろうが、広さというものを時代的に見ないで、現在に基づいて判断する傾向を示している。

以上を通して、歴史的概念のイメージは概念の相違によって反応する傾向が異なり、一つ概念でこうだといういい方はできない。媒介過程にはたらく意味が自由とか平等というある価値をもつ場合は、既有知識と相まって学習前から好意的であり、美化されてとらえられ、学習を通してそれが強められていく傾向がある。しかし、戦争という意味が媒介過程にはたらくときは、反応が複雑で共通の方向に反応をせず、方向性が明瞭でない。また、その評価的側面に関しては、勝利の結果から肯定的にみようとする者と被害という側面から否定的に見ようとする者がある。また視聴覚に訴える手段をとるか、とらないか、という指導形態も、このようなイメージ形成に大きく影響している傾向があるといえよう。

しかし、両者にある程度共通していることは、事象相互を広く関係づけて、時代の流れに位置づけてとらえられない思考傾向が、その感じ方を浅いものにして、美化したり、単純な割り切ったイメージを形成する傾向があることは指摘できよう。またイメージ形成に強く影響しているのが、具体性のある情報量の大きい表現(説明)であること、情緒的に訴えるひびきをもつ表現であることも共通にみられた点である。さらに、上、中、下位群別にみると、その反応の方向が学習前では上位群ほど既有知識と連想的な思考によってどちらかの方向にはっきり判断するが反面先走って判断したり、型にはまった考え方をする危険性はあるといえよう。日露戦争でも、自由民権運動ほど明瞭でないがこの傾向は見られる。それに対して下位群の学習前の反応は、方向性が明瞭でなく学習を通しての変化も全般的に少ない傾向があり、情報を受け入れ、イメージを形成する感じ方は、にぶいということができよう。

そしてこのような、いくつかのイメージがつみ重なって、戦争とか、民主政治に対する歴史的な見方を形成し、社会的態度に影響を及ぼしていくといつてよかろう。そこで、学習の結果このような歴史事象に対してどのような考え方をもちようになったかを以下で検討してみたい。

4 歴史の受けとめ方、見方の傾向 —意見調査を通して—

これまで歴史的概念として関係づけようとする事象は直接関係する現象的な史実が多く、それを意味づける時代的背景となる事象は理解困難なものと相まって比較的關係づけられずイメージとしての感じ方にも浅いところもあるようすが見受けられた。そこで、ここでは学習後自由民権運動や日露戦争について意見調査をした結果の考察を通して生徒が歴史事象をどのように見たり、考えたりしているか検討してみたい。

(1) 自由民権運動

この調査は研究方法で述べたごとく自由民権運動に対する諸調査の結果を参考にして、下記のAからEまでの五つの内容に基づく意見とそれに対する肯定、否定の反応を記させる尺度から成り立っている

自由民権運動

- A. 史実をふまえて批判的な意見や建設的な意見を述べたもの 6問
- B. 運動の起り、経過、影響などを史実に即して客観的に叙述したもの 6問
- C. なんとなくよいというばかりでぜんとした見方を述べたもの 6問
- D. 自由、平等ということですべてを肯定したり美化した見解を述べたもの 6問
- E. 反政府的、批判的言動を否定する考えを述べたもの 6問

結果はそれぞれの尺度値に、そう思う(強く) = +2 そう思う(少し) = +1 どちらでもない = 0 そう思わない(少し) = -1 そう思わない(強く) = -2の得点を与え、意見毎に平均値を出してみると12表のようになる。

12表 自由民権運動(一は否的の意見)

	全体	上位群	中位群	下位群
1. 民選議院設立の意見書の提出 について				
ア、自由や平等ということで、行動するならばすべて立派なことだと思う。(D)	0.56	0.66	0.50	0.66
イ、藩閥政治に対して国民から議員を選んで政治を行なおうという考えでしたのだと思う。(B)	1.22	1.80	1.17	0.70
ウ、政府に対して、反対したり、批判したりすることは危険な考えかたでよくない。(E)	-1.27	-1.43	-1.47	-0.83
エ、議院設立の意見書を提出したのだから、なんとなくよいことだと思う。(C)	0.71	0.83	0.85	0.40
オ、新しい思想をくみ入れて、政治を改めようという正義感を感じる。(A)	1.42	1.46	1.42	1.36
2. 自由民権運動の広まり について				
ア、北海道から九州までの範囲でいろいろな職業の人が参加したから全国的な運動だと思う。(B)	1.73	1.90	1.95	1.36
イ、ただ政府のやりかたに不満をもつだけで参加した人も多から、こういうことは複雑なものだと思う。(A)	0.26	-0.30	0.22	0.26
ウ、自由や国民の権利を願う運動なら、いつでも苦勞しなくても人々の賛成をえられると思う。(D)	-0.70	0.96	-1.00	-0.03
エ、運動が全国的に広まったことは、なんとなくよいと思う。(C)	1.01	0.96	1.40	0.93
オ、このような運動が全国的に広まることは政治をする人が困るからよくないことだと思う。(E)	-1.51	-1.70	-1.67	-1.10

3. 政府の自由民権運動に対する取りしまり について

ア、自由や国民の権利を口にする人たちなら、それを取りしめるのはよくない。(D)	0.69	0.96	0.32	0.60
イ、政府に反対したり、批判したりする人々は、もつときびしく取りしめるべきだと思う。(B)	-1.02	-1.13	-1.17	-0.70
ウ、政府の取りしまりに負けず自由のため信念をもって行動した人を偉いと思う。(A)	1.55	1.70	1.82	1.03
エ、政府の行なった取りしまり政策をなんとなく悪いと思う。(C)	0.28	0.36	0.42	0.
オ、集会条例や新聞条例をだしたことは、政治が民主的でなかったと思う。(B)	1.05	1.53	0.95	0.70

4. 自由民権運動の発展 について

ア、二つも政党ができ国会の開設にそなえたのだから積極的な運動だと思う。(B)	1.20	1.33	1.40	0.80
イ、この運動はなんとなく最後まで一つのことをつらぬき通した運動だと思う。(C)	0.62	0.73	0.82	0.36
ウ、自由や国民の権利を実現させようとした運動だからとうぜん最後まで立派に発展したと思う。(D)	0.07	-0.10	-0.20	0.60
エ、強い取りしまりで運動の勢いがおとろえたから、始めからもつと強く取りしめるべきであったと思う。(B)	-0.69	-0.90	-0.90	-0.20
オ、せつかく政党をつくりながらも、仲間割れをしたり各地で暴動をおこしたりしたことを、おしいと思う。	1.36	1.56	1.52	0.93

5. 自由民権運動の影響 について

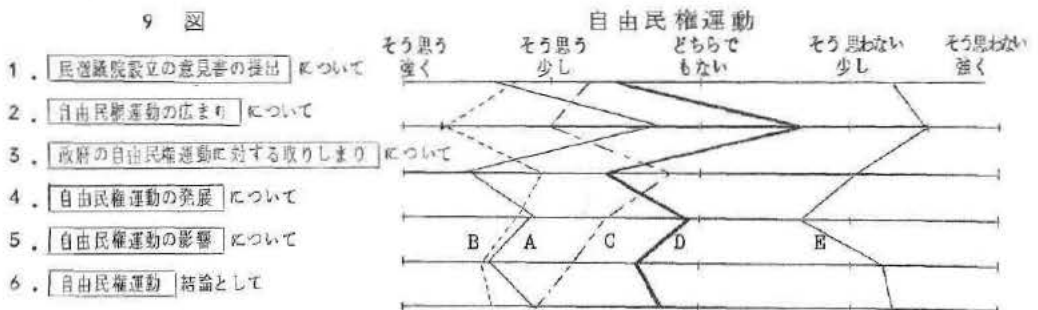
ア、国会の開設や大日本帝国憲法の制定など、政治の民主化に大きな影響を与えたと思う。(B)	1.45	1.63	1.35	1.30
イ、どんな良い影響があろうとも政府に反対したり批判をすることはよくないと思う。(B)	-1.24	-1.56	-1.67	-0.66
ウ、この運動によって、政治ががらりと自由平等を尊重するようになったので、影響は大きいと思う。(D)	0.42	0.03	0.25	0.90
エ、なんとなく、日本の政治に良い影響を与えたと思う。(C)	0.72	1.13	0.80	0.53
オ、日本を近代国家に一歩近づけたのだから、この運動の中心となって進めた人は偉いと思う。(A)	1.42	1.53	1.55	1.13

6. 最後に結論として 自由民権運動 は

ア、自由民権運動はなんとなく、よい運動だと思う。(C)	1.09	1.56	1.17	1.13
イ、議会政治をめざした全国的な政治運動で政治の民主化に大きな影響を与えたと思う。(B)	1.35	1.43	1.40	1.16
ウ、このような運動は、危険な思想による反政府的な運動だから平和な社会をみだすよくないことだと思う。(B)	1.31	-1.56	-1.55	-0.73
エ、政治の民主化が、こういう運動によって進められたのだから議会政治をたいせつにしなければならぬと思う。(A)	1.13	1.43	1.00	1.00
オ、国民の自由や権利を目的にした運動だから、すべてが立派に行なわれた運動だと思う。(D)	0.26	0.20	0.27	0.30

このA、B、C、D、Eの内容をもつ各意見に対して、それぞれ肯定、否定の方向がどのようなものであるか、12表に基づいてプロフィールをえがいてみると9図のようになる。

9 図



①、文章記述の場合には、自由民権運動の起こり、経過、影響などを客観的に述べたものや建設的な見解を述べたものが最も肯定され、運動を否定する見解は否定され全体としては肯定的、建設的な意見であり、政治に対する態度としては好ましい反応傾向である。

9図のプロフィールにみられるように肯定の強さの順は、運動の起こり、経過、影響などを客観的に述べたもの、Bの批判的、建設的な見解を述べたもの、Cのなんとなくという見方を述べたもの、D

13表 自由民権運動

	上	中	下	計
1. A・B>C・D>E	26	30	16	71
2. A・B・D・E<C	1	3	1	5
3. A・B・C・E<D		2	1	3
3' A or B ≤ D	2	5	9	16
4. A・B・C・D<E	0	0	2	2
5. A=B=C=D=E	1	0	1	2
計	30	40	30	100

の運動を美しい完全なものとして考えた見解を述べたものの順であり、Fの運動の反政府的、批判的言動を否定した見解は否定される。また、これを個人的にA、B、C、D、Eのうちどのような順に肯定しているかみると13表のようになる。これまでの検討では運動の性格を意味づける事象は関係づけようとしないう傾向があり、イメージも美化されていた傾向を示していたが、このように概括した文章で相対的な順でみるとDの順位は低く一応正しい受けとめ方、見方をしているといえよう。しかし、13表に見られるようにDを強く肯定している者もかなり多く、また1のタイプの中にも運動の性格に対する批判的見解には肯定が弱かったり、これまで検討

してきた問題が受けとめ方や見方にも影響してきていることは、これから検討したい。しかし全体としてみるとこの運動の経過や影響を客観的に認めるとともに民主政治を尊重していこうとする政治に対する態度としては好ましい反応傾向である。

② 最も強く肯定された意見と、否定された意見をみると学習指導におけるコミュニケーションの影響が認められる。

最も強く肯定された意見は2のB「北海道から九州までの範囲でいろいろな職業の人が参加したから全国的な運動と思う。」という意見で次が3のA「政府の取りしまりに負けず自由のため信念をもって行動した人は偉いと思う。」という意見である。また最も強く否定された意見が「このような運動が全国的に広まることは政治をする人が困るからよくないと思う。」という意見である。この点は前の節のイメージ形成の問題で述べた生徒が特に強く感じていた「北は北海道から南は九州まで。あるいは『民権運動をした人たちが豚箱にぶち込まれた。』という表現のコミュニケーションがここでも影響していると言ってよかろう。したがって非常に具体的な情報量の大きい表現や情緒的に訴える表現はイメージ形成や歴史事象に対する見方、受けとめ方にも影響するということになるし、反面、中学生はこのようなコミュニケーションによって事象に対する考え方が左右されやすい傾向をもつといえる。

③ Bの客観的な叙述に対する反応傾向は、概念形成における生徒の認識と深い関係をもっている。またこの反応と他の内容の反応との相関を見るとAやCの内容に対する反応と相関がある。

肯定の強いBの叙述は、生徒が概念形成の過程で関係づけようとした者の多かった、経過、結果などの史実を概括して述べたもので、現象的なとらえやすい史実である。したがってこれを強く肯定したから深い歴史認識に立った反応であるとはいわれぬが、学習を通しての認識の傾向がここに反映さ

れているということが出来る。この中で、3のオの集会条例、新聞条例に対する肯定の反応が弱いのは、集会条例や新聞条例を出したということがわかったとしても、それが民主的であるか、ないかという判断がうまくつかず肯定も弱まったと思う意味をじゅうぶんは握していないことに原因がある。このBの内容に対する反応が他の内容に対する反応とどのような関係になっているかみるため、個人別に尺度値の得点換算したものを内容毎に集計して相関係数を出して見ると次のようになる。

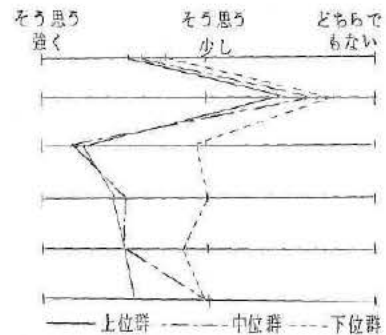
	A	C	D	E
B	0.448	0.455	0.025	-0.399

BはA、Cと高くはないが相関がある。6問ずつ集計したものの相関であるから、相関は低くなるわけだが、だいたいの傾向としてBを肯定した者は、運動に対する批判的建設的意見を肯定し、また、なんとなくよいという意見をも肯定している傾向を示している。Eとの相関が負であり低いのはBの内容として運動の意義を肯定しながら、これを否定する見解を否定できない非論理的な反応を示す生徒が一部存在したからである。

- ④ Aの史実をふまえた批判的、建設的な見解を述べたものに対する反応を検討すると、その時代において事象を見、批判することは容易でない傾向がみられ、特に下位群においてそれが著しい。

10図

1. オ 新しい思想をくみ入れて、政治を改めようという正義感を感じる。
2. イ ただ政府のやりかたに不満をもつだけで参加した人も多いから、こういうことは複雑なものだと思う。
3. ウ 政府の取りしまりに負けず自由のため信念をもって行動した人を偉いと思う。
4. オ せっかく政変をつくりながら、仲間割れをしたり各地で暴動をおこしたりしたことをおしいと思う。
5. オ 日本を近代国家に一步近づけたのだから、この運動の中心となって進めた人は偉いと思う。
6. エ 政治の民主化が、こういう運動によって進められたのだから議会政治をたいせつにしなければならないと思う。



Aに関する内容についての反応を上中下位群別にプロフィールにして示すと上図のようになる。比較的肯定の強さが弱いのは、民権運動の性格を批判的に述べた2のイや4のオであったが、4のオは下位群が特に肯定度が低いからである。また、6のエが肯定度が低いのは、下位群と中位群が肯定度が低いからである。2のイが全体として肯定度が低いのは、前の節の概念形成で検討したごとく、この運動に参加した人たちが不平士族や、農民たちで、それらの人々は地租改正や、俸祿の処分などに対する不満から参加した者が多いことに対する理解のじゅうぶんな点がここでもあらわれたものと考えられる。自由民権運動の場合、自由や平等という価値に影響され、どうしても美しく考えがちになるが、それを批判するには、その時代の史実の上にたって考察することが必要である。しかし、生徒にとってはこのような歴史的に思考することがじゅうぶんであるということができよう。

- ⑤ 批判的にみられない反面、Dの自由とか平等、民権ということから、ただちに美化して述べた見解を肯定する者がかなりあり、史実に即して、時代において考える思考傾向が乏しいことを示している。9図のプロフィールでは平均値が中央よっているのので、反応の分布によって、Dの中の2、3を検討すると14表のようになる。

14表

2.ウ 自由や国民の権利を願う運動ならいつでも苦勞しなくても人々の賛成をえられると思う。

	+2	+1	0	-1	-2	計
上位群	1	3	3	12	11	30
中位群	4	2	2	14	19	40
下位群	4	8	5	9	4	30
計	9	13	10	35	33	100

4.ウ 自由や国民の権利を実現させようとした運動だからとうぜん最後まで立派に発展したと思う。

	+2	+1	0	-1	-2	計
上位群	3	8	6	9	4	30
中位群	6	4	12	12	6	40
下位群	7	11	6	5	1	30
計	16	23	24	26	11	100

5.ウ この運動によって政治が、がらりと自由平等を尊重するようになったので、影響は大きいと思う。

	+2	+1	0	-1	-2	計
上位群	4	11	1	8	6	30
中位群	10	13	3	5	9	40
下位群	11	12	6	1	0	30
計	25	36	10	14	15	100

3.ア 自由や国民の権利を口にする人たちならそれを取りしまるのはよくない。

	+2	+1	0	-1	-2	計
上位群	11	10	6	3	0	30
中位群	9	14	9	6	2	40
下位群	5	14	7	2	2	30
計	25	38	22	11	4	100

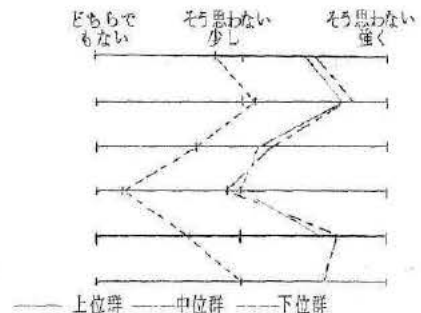
このように、反応は分散し、自由、平等、民権ということから運動を完全な、立派なものとして、とらえようとする傾向がある。これは、前の節で検討したごとく学校放送の影響や、運動の背景などの理解困難な点もあるが、運動の歴史的影響や、自由民権という価値的のことはから表面的なとらえ方をして、歴史の流れに位置づけ、史実に即して見ようとする思考態度が欠けているということが出来る。したがって、政治に対する社会的態度の面では好ましい反応傾向を示しているが、歴史的な思考態度としては不じゅうぶんな反応傾向を示している。

⑥ 下位群は、上中位群に比べ客観的な叙述や、批判的、建設的な見解には肯定が弱い反面、民権運動を否定する見解にはあまり否定せず、このような意見を弁別して判断する知見が乏しい。

すでに見てきたように下位群と上、中位群とでは肯定の強さがかなり異なるが、Eのような民権運動を否定する見解を述べたものに対しても、次のような傾向がみられる。

11図

- 1.ウ 政府に対して、反対したり、批判したりすることは危険な考えかたでよくない。
- 2.オ このような運動が、全国的に広まることは政治をする人が困るからよくないことだと思う。
- 3.イ 政府に反対したり、批判したりする人々は、もつときびしく取りしまるべきだと思う。
- 4.エ 強い取りしまりで運動の勢いがおとろえたから、始めからもつと強く取りしまるべきであったと思う。
- 5.イ どんな良い影響があろうとも政府に反対したり批判をすることは、よくないと思う。
- 6.ウ どのような運動は、危険な思想による反政府的な運動だから平和な社会をみだすよくないことだと思う。



反応の傾向は全くひとしいが、その否定の程度は異なる。社会的態度には、価値あるものとそうでないものを弁別する判断力を含み、それを「知見」と橋本重治は述べているがそういう意味では下位群は知見が上中位群に比べて劣るといえよう。⁽¹⁵⁾また、4のエが上中下位群がともに否定が弱いのは、3のイとともに民権運動は否定しないが、いっぽう政府に反対したり、批判する行為を取りしめるのは国としては当然であるという意識もはたらいで否定が弱くなったことが考えられる。このEの内容に対する反応と他の内容に対する反応の相関をみると次のようになり、A、B、Cとは負の相関であるが

	A	B	C	D
E	-0.230	-0.399	-0.293	0.146

低い相関であるから自由民権運動に関するA、B、Cの内容をもつ個々の意見については肯定しながら運動を否定する見解を肯定したり、その否定のしかたが弱かったりする者が一部存在するからである。

- ⑦ 20ページと24ページに例示した生徒がどのような受けとめ方や見方をしているかみると15表のようになり、理解、思考、ステレオタイプなどが影響している様子がみられる。

15表	Aのタイプ=M. Y (男)					Bのタイプ=M. S (女) ²⁴ ページ				
	A	B	C	D	E	A	B	C	D	E
1, 民選議院設立の意見書について	+1	0	-2	+2	+2	+2	-1	+1	+2	-2
2, 自由民権運動の広まりについて	+2	+2	0	-1	+1	+1	+2	0	+2	-2
3, 政府の取りしまりについて	+1	+1	+2	+2	-2	+2	+1	0	+2	-2
4, 自由民権運動の発展について	-1	-1	+1	0	-2	+2	+1	0	+2	-1
5, 自由民権運動の影響について	+1	-2	-2	0	+2	+1	+1	0	+2	-1
6, 結論としての自由民権運動	+1	0	-2	0	-1	+1	+2	+1	+1	+1

	Cのタイプ=K. H (女)					Dのタイプ=M. N (男)				
	A	B	C	D	E	A	B	C	D	E
1, 民選議院設立の意見書について	+1	+2	+1	+1	+1	+2	+2	+2	0	-2
2, 自由民権運動の広まりについて	0	+2	+1	0	0	+1	+2	-2	-2	-2
3, 政府の取りしまりについて	+2	+1	0	0	0	+2	+2	0	0	-2
4, 自由民権運動の発展について	+1	+1	+2	+1	0	+2	+2	+1	-1	-1
5, 自由民権運動の影響について	+2	+1	+1	+1	0	+2	+2	+1	-2	-2
6, 結論としての自由民権運動	+2	+1	+1	+1	0	+2	+2	+1	-2	-2

+2=そう思う(強く) +1=そう思う(少し) 0=どちらでもない -1=そう思わない(少し) -2=そう思わない(強く)

M. Yは学習を通して獲得する知識が少なく、先生がいったから、教科書にあったから、という理由で断片的に事象をとらえていたが、事象に対する見方として、客観的に述べた見解をときには否定し民権運動を否定する見解には肯定したり否定したり確定性のない矛盾した見方をしている。思考力のないことが強く影響しているであろう。M. Sは学習前から、自由という意味から連想的に事象を関係づけようとし、学習を通しては表面的にとらえやすい事象を、今日学んだからというような理由で

関係づけようとする。この結果、A、Bにはやや弱い肯定を示すが、それ以上にDの美化した完全なものとする見解を肯定する。理解の不じゅうぶんとステレオタイプからくる見方を示しているといえる。K・Hは上位群で、時代的なとらえ方のできない意識傾向を示していたが、DやEを否定せず、どちらでもないという意見であり、客観的に述べたBの見解もそう強い肯定とはいわれぬ。歴史的な思考傾向がまだ不じゅうぶんであることや、やはりステレオタイプの強さを感じさせる。M・Nは柔軟な理解のしかたを示していたがA・Bを強く肯定し、C・Dを否定するという歴史の見方としても政治に対する態度としても好ましい反応傾向である。この調査では理解、思考というものが強く影響している結果を示しているが、学習内容に対する受けとめ方、見方となるとどうしても、どう認識したかという面が強くてくる点は今後さらに検討したいと思っている。

(2) 日露戦争

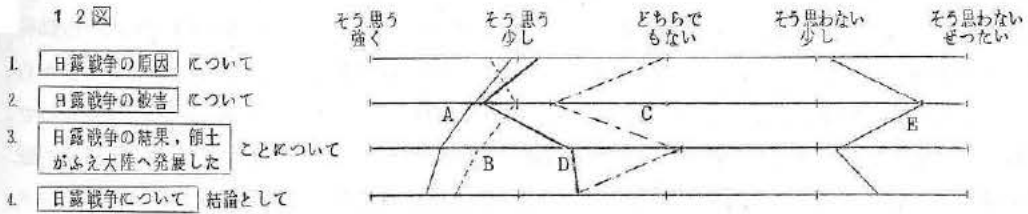
日露戦争については次のAからEまでの五つの内容に基づく意見で調査を行なった。

- | | |
|--|----|
| A, 日露戦争を批判する見解を述べたもの | 4問 |
| B, 日露戦争の原因、影響、に関する客観的な叙述と当時の日本人の心情を述べたもの | 4問 |
| C, なんとなくよいとか悪いというばくぜんとした受けとめ方を述べたもの | 4問 |
| D, 日露戦争を道徳的な観点から強く否定した意見を述べたもの | 4問 |
| E, もっと戦争をしてでも積極的に発展したほうがよかったという見解を述べたもの | 4問 |
- この結果を自由民権運動と同様に尺度値に得点を与え平均値を算出してみると16表のようになる。

16表 日露戦争

1 日露戦争の原因	全体	上位群	中位群	下位群
ア ロシアが満州、朝鮮に勢力を伸ばして日本の勢力をおさえようとしたのが大きな原因だ と思う。(B)	1.19	1.53	1.07	1.00
イ そのころ、強国が弱い国に勢力を伸ばそうとして争ったことが戦争のおきた重要な原因 だと思う。(A)	1.03	1.23	1.15	0.70
ウ たとえ昔であっても、またどんな理由でもすべて話し合いで解決しなかつたことは絶対 悪いと考える。(D)	0.87	0.93	0.75	0.83
エ 戦争は悪いことだから原因もなんとなく悪いと思う。(C)	0.05	0.20	-0.25	-0.06
オ 日本が大陸に進出するために、もっと積極的にロシアに戦争をしかけたほうがよかつた と思う。(E)	-1.10	-1.50	-1.25	-0.50
2 日露戦争における被害(死傷者)				
ア たとえ昔であっても、またどんな理由でも人を殺しあう争いは絶対悪いと考える。(D)	1.35	1.46	1.50	1.03
イ 国が発展するという理由ならどんなに多くの人が死んでもよいと思う。(E)	-1.72	-1.85	-1.80	-1.76
ウ 人が死んだりすることは、なんとなく悪いと思う。(C)	0.78	0.90	0.90	0.50
エ 戦争は悪いことだがそのころの日本の人たちが国のために生命をすてて戦った気持ちに 心がうたれる。(B)	1.02	1.00	1.10	0.93
オ 兵器が発達するにつれて多くの死傷者をだすから時代が進むほど平和ということがたい せつになると思う。(A)	1.30	1.73	1.40	1.10
3 日露戦争の結果 領土がふえて大陸へ発展した ことについて				
ア 勝てる戦争をもっと多くして領土をふやしたり輸出を増加したほうがよかつたと思う。(E)	-1.14	-1.30	-1.45	-0.56
イ たとえ昔のことでも戦争による発展はぜつたい悪いことだと思う。(D)	0.62	0.76	0.62	0.46
ウ 戦争に勝って日本が発展したことがなんとなくよいと思う。(C)	-0.09	-0.30	-0.27	0.36
エ 日本の産業が発達し、国際的地位が向上したのは、このような戦争によることが大きい と思った。(B)	1.26	1.33	1.27	1.16
オ そのころは世界的に、強国が弱い国をぎせいに発展したのだから、そのような時代を二 度とくり返さないようにしたい。(A)	1.54	1.63	1.65	1.30
4 結論として 日露戦争 については				
ア 強国が弱い国をぎせいに発展した時代の戦争で、このような時代をくり返さないこ とが平和にとってたいせつである。(A)	1.62	1.70	1.70	1.43
イ たとえ昔でも理由はどちらであらうと日露戦争は戦争である以上絶対悪いことだと思 う。(D)	0.59	0.46	0.75	0.56
ウ 戦争という名がつくので、なんとなく悪いことだと思う。(C)	0.10	0.30	0.50	0.26
エ そのころは、このような戦争をもっとどしどし行なつて、もっと積極的に発展したほう がよかつたと思う。(E)	-1.40	-1.86	-1.47	-1.33
オ 日本が大陸に進出し、国際的地位を高める上にきわめて大きな影響をもたらした戦争だ と思う。(B)	1.44	1.56	1.50	1.23

A, B, C, D, Eの内容別プロファイルを書いてみると12図ようになる。



- ① 日露戦争に対する批判が最も肯定され、戦争をしてでも積極的に発展すべきだという意見を述べたものが最も否定され、全体としては批判的否定的である。

肯定の強い順に見ると、Aの日露戦争を批判する意見、Bの原因、影響に関する叙述、Dの道徳的な観点からの否定、Cのなんとなくよい、悪いというばくぜんとした受けとめ方の順で、Eの当時はもっと戦争をしてでも積極的に発展すべきだ、という意見は否定される。日露戦争については当時の国際関係を示す事象を関係づけられず、戦争の原因を複雑なものとしてとらえない傾向が見られたが、このようにその時代の傾向を概括して批判する文章表現として他の意見とならべると強く肯定されるのは、国際関係をじゅうぶん理解して反応したのでなく、現代の立場にたつてその時代の戦争を批判する表現であるから肯定が強かったと考えられる。さらに、道徳的な立場から強い戦争否定を生徒が相当強く肯定している点からも生徒なりの現在における価値観の上に立って日露戦争を批判的、否定的に考えているとよいか。いっぽうでは、この戦争による日本の大陸進出や国際的地位の向上を客観的に認める反面、他方では現在の価値観によってこの戦争を批判し否定しようとする傾向を示しているわけだから戦争に対する社会的態度という面で見ると好ましい反応傾向であるといえるが、現在の価値観によって歴史事象を考えようとする問題を含んでいるので、この点は後で検討したい。

- ② 生徒が最も強く肯定した意見や否定した意見を見ると、戦争に対する批判的意識と同時に、学習指導におけるコミュニケーションも影響していると考えられる。

最も平均値の高い意見を見ると4のA「強國が弱國をぎせいにして発展した時代の戦争で、このような時代をくり返さないことが平和にとってたいせつである。」で、最も強く否定された意見が「國が発展するという理由ならどんなに多くの人々が死んでもよいと思う。」という意見である。生徒の戦争に対する意識が強く反映されていると同時に、学習指導におけるコミュニケーションの中で「日本の戦死者はロシアの約2倍。」ということをもっと印象強く受けとめた生徒が多かったことを考えると、戦争に対する意識と、指導の影響とが重なって反応していると考えられる。もともと、このような表現に強く感ずることはそれを強く受けとめる潜在的な意識があるともいえるが、それをさらに強める刺激として、戦死者、戦費の統計、与謝野晶子の詩などをプリントして指導したことも影響しているであろう。自由民権運動の場合でもそうであるが、具体的な、しかも情緒的に訴える説明は、その事象に対するイメージや考え方に影響を与えるわけだから、何をエピソードとして話すか、どんな資料を提示するかという選択は単に知識理解だけでなく次元の異なった解釈、評価にもひびく重要な問題である。

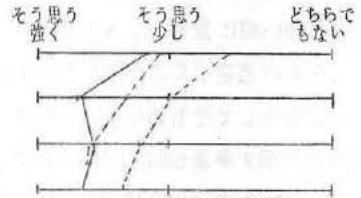
- ③ 生徒が概念形成においてとらえやすかった戦争の結果に関する事象を客観的に叙述したものより戦争に対する批判が強く肯定されるがその中では原因を批判するものの肯定が最も弱く日露戦争をその時代において見ようとする意識が強いとはいえない。

全体としてみると戦争による日本の発展を認めながら、いっぽう戦争を批判する好ましい傾向であるがさらに、その批判を検討すると原因に対する批判の肯定が弱く、現在の平和という観点から批判を述べた表現に対する肯定が強い。戦争に対する批判的意識を伸ばすことは社会科の目的であるから好ましい反応の傾向であるが一面歴史学習は事象の因果の連鎖をあくまでリアルに追求するものであり、その結果として生徒なりに考え方見方を深めるものである。したがって戦争に対する歴史的認識が深まっているとするならむしろ原因に対する批判にも強い肯定があつてよいわけであるがこの肯定はAの中では13図のように弱い傾向がある。そして、これはまた下位群ほど著しい。

13図

1. イ そのころ、強国が弱い国に勢力を伸ばそうとして争つたことが戦争のおきた重要な原因だと思う。
2. オ 兵器が発達するにつれて多くの死傷者を出すから時代が進むほど平和ということがたいせつになると思う。
3. オ そのころは世界的に、強国が弱い国をぎせいに発展したのだから、そのような時代を二度とくり返さないようにしたい。
4. ア 強国が弱い国をぎせいにして発展した時代の戦争で、このような時代をくり返さないことが平和にとってたいせつである。

—— 上位群 —— 中位群 —— 下位群



自由民権運動の場合、その時代の史実に即して批判することが容易でない傾向がみられたが、日露戦争でも現在の意識から批判することは容易であるが、その時代において批判することが容易でない傾向がみられるわけである。また、このAの内容に関する意見と他の内容に関する意見を見ると次のようになり、この肯定の強い者は、日露戦争の原因、影響に関する客観的な叙述を肯定し、反面、当時

	B	C	D	E
A	0.583	-0.886	0.247	-0.570

はもっと戦争をしてでも発展したほうがよかったという意見を否定するという傾向を示している。しかも、なんとなくという受けとめ方や、日露戦争を道徳的な観点から否定する内容に対する反応とは相関がないか、低い相関であるから一応好ましい傾向を示しているといえよう。

- ④ 戦争に対する道徳的観点から否定しようとする意識が過去の歴史事象に対しても強くはたらいて日露戦争も道徳的な観点から否定しようとする意識が強い。

17表 日露戦争

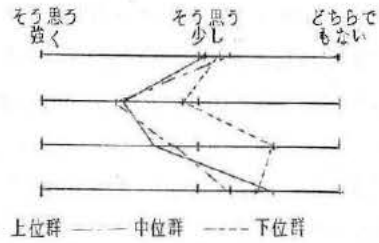
	上	中	下	計
1. A・B>C・D>E	15	15	15	45
2. A・B・D・E<C		2	2	4
2' A or B=C	1			1
3. A・B・C・E<D	5	6	5	16
3' A or B≤D	8	16	6	30
4. A・B・C・D<E			1	1
4' A or B=E			1	1
5. A=B=C=D=E	1	1		2
計	30	40	30	100

自由民権運動と同様に、個人毎にどのような内容に最も強く肯定しているかみると17表のようになる。1のタイプが一番多いタイプであるが、道徳的観点で否定する見解に最も強く肯定している者もかなりおりAまたはBと同じ程度に肯定している者も合わせると1のタイプとはほぼ同じになる。そして、これは理解状態とは関係なく上位群にも多い。近代という時代であることと相まって戦争という歴史事象に対する生徒の見方を示しているといえよう。

Dの道徳的観点からの否定に対する反応を上中下位群別にプロフィールに書いてみると14図のようになる。

1.4 図

1. ウ たとえ昔であっても、またどんな理由でもすべて話し合いで解決しなかったことは絶対悪いと考える。
2. ア たとえ昔であっても、またどんな理由でも人を殺しあう争いは絶対悪いと考える。
3. イ たとえ昔のことで戦争による発展はぜつたい悪いことだと思う。
4. エ たとえ昔でも理由はどうあろうと日露戦争は戦争である以上絶対悪いことだと思う。



2のアや3のイは肯定が比較的強く、また上中位群ほどその傾向が強い。昔のことであったとしても道徳的には悪いことだとする意識が強いわけである。しかし過去の実際あったことに対して、道徳的に否定しきれないものがあるという意識もはたらくようになっていることは、1,ウや、4,エの肯定が弱いことよってみられる。

しかし、まだそのように歴史事象をリアルにみつめようとする意識が不じゅうぶんであるから1.8表のような反応分布になる。

1.8表

たとえ昔であっても、まだどんな理由でもすべて話し合いで解決しなかったことは絶対悪いと考える。

たとえ昔でも理由はどうあろうと日露戦争は戦争である以上絶対悪いことだと思う。

	+2	+1	0	-1	-2	計		+2	+1	0	-1	-2	計
上位群	10	13	2	5	0	30	上位群	8	7	7	7	1	30
中位群	7	20	3	8	0	40	中位群	8	21	5	5	1	40
下位群	12	9	3	4	2	30	下位群	5	14	4	5	2	30
計	31	42	8	17	2	100	計	21	42	16	17	4	100

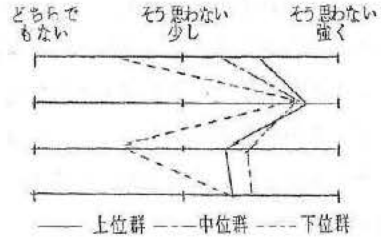
この反応を見ると、結論として日露戦争は戦争である以上絶対悪いという見解を肯定した生徒は63名で戦争に対する現在の価値意識で、過去の事象をとらえようとする傾向が強いといえよう。上位群の中の一女生徒がイメージ調査における感想で「私は戦争はいけないことだと思うしいやだ。しかしその当時は今と違ったいろいろな条件や理由がある。昔のことを悪いというより、そういう理由など考えることがたいせつだと思う。」と書いてあった。このような現在の価値観と切り離して、歴史事象を歴史的存在としてリアルに見つめようすることは、中学生の発達段階では無理な点もあろうが歴史を学習する態度としては重要なことである。ネールが「父の子に語る世界史」において「現代の標準で過去を判断することはできない。これはいうまでもなくだれもが認めることだろう」と述べ、さらに「生きていた人を理解するには、彼の周囲、彼をとりまいている環境、彼の心を満たしている想念を理解しなければならない」と言っていることを、そのまま中学生に要求することは無理としても、事象を時代の流れに位置づけて、当時の国際情勢の中に考えさせる指導上の配慮が歴史的な思考態度形成には非常に重要なこととなってくるわけである。

- ⑤ 下位群は、自由民権運動の場合と同様に、客観的な叙述や戦争批判には肯定的反応が弱く、Eのもっと積極的に発展したほうがよかったという内容については否定の反応が弱い。歴史に対する認識が浅いこととこのような意見に対して弁別し判断する力が劣るといえる。

この点は自由民権運動においても見られたことであるが日露戦争も同様に、Aの戦争に対する批判は13図に見られるように上中位群に比べて肯定度が低い反面、15図のようにEのもっと戦争をしてでも発展したほうがよいという意見の一部については上中位群に比べて否定度が弱い。さらにその内容を検討すると、アに対する否定は上中位群に比べて低い、同じ意味の結論としての4のエについては上中位群とあまり変わらない。戦争をして積極的に発展したほうがよいという見解にときには肯定し、ときには否定する非論理的な者や、どちらでもないというところに反応する確定性のない者がいるからである。

15図

1. オ 日本が大陸に進出するために、もっと積極的にロシアに戦争をしかけたほうがよかったと思う。
2. イ 国が発展するという理由ならどんなに多くの人死んでもよいと思う。
3. ア 勝てる戦争をもっと多くして領土をふやしたり輸出を増加したほうがよかったと思う。
4. エ そのころは、このような戦争をもっとどしどし行なって、もっと積極的に発展したほうがよかったと思う。



Bのような客観的な叙述に対する肯定が弱いのは、歴史事象に対する認識が浅いからであるが、それだけでなく、文章記述に対する読解力、弁別し判断する能力などいろいろ総合されたものの結果と考えられる。

なお、このEの内容に関する意見の反応と他の内容に対する反応の相関を見ると次のようになり

	A	B	C	D
E	-0.57	-0.08	-0.03	-0.38

Aとは負の相関があり、他の内容とは負の相関となるが、Dを除いて非常に低い。日露戦争を批判した者は戦争による発展を否定したことになるが道徳的な観点から日露戦争を否定しようとするものに対する反応とあまり相関がないのは、EとDの両方を否定する者があるからである。この調査における反応は、AとEは相反している傾向がはっきりしたわけで前者を肯定し、後者を否定する方向の反応が多いから戦争に対する社会的態度としては好ましい傾向を示しているわけである。

- ⑥ なんとなく悪いという見解には、肯定、否定が分かれるが、これを肯定している者は、戦争という概念を媒介して否定的に日露戦争を考えようとする傾向を示している。

日露戦争の原因、結論としての考えを述べたものに対する反応の分布をみると次のようになる。

19 表	1, 戦争は悪いことだから原因もなんとなく悪いと思う。						4, ウ, 戦争という名がつくのでなんとなく悪いことだと思う。						
	+2	+1	0	-1	-2	計	+2	+1	0	-1	-2	計	
上位群	2	12	8	6	2	30	上位群	3	12	4	5	6	30
中位群	1	13	14	10	2	40	中位群	2	14	9	13	2	40
下位群	0	12	7	8	3	30	下位群	2	13	7	7	1	30
計	3	37	29	24	7	100	計	7	39	20	25	9	100

これは、結局、④で述べた日露戦争を歴史事象として考えるより、戦争という現在の考え方でとらえようとする傾向を示しているわけであるが、これはまた自由、平等ということで歴史事象を美しく

とらえようとする傾向と相通ずるものがある。そしてこの傾向は、自由、平等、戦争という意味が媒介過程にはたらいっていることを意味し、それがよいとか悪いという問題でなく、ある価値的な意味をもつことばが媒介する場合には、歴史事象を史実に即して考えず、これはよいとか悪いとか簡単に割り切って考えようとする傾向を示している。

以上、自由民権運動と日露戦争の意見調査の反応傾向を見ると、その原因、経過、影響に関する客観的な叙述に対しては両者ともに肯定され、その両者の反応の相関をみると、 0.563 となり相関もあり、事象の原因、経過、影響に関する比較的とらえやすい側面については客観的に考える反応傾向を示している。しかし、その批判的な面についてはともにその見解を肯定しているが、日露戦争では現在の立場からその時代を批判する表現に対する肯定は強いが、原因に対する批判の肯定は弱く、自由民権運動は当時の史実に対する深い認識がないと批判できない面もあって、民権運動の中における肯定の強さはやや劣る傾向が見られた。したがって批判に関する内容だけの両者の相関係数を出してみると、 0.326 となり低い相関である。また自由民権運動については、自由とか平等でただちにそれを美化する見解を肯定する者がかなりあり、日露戦争については、戦争ということで道徳的に強く否定する見解に肯定する者がかなりある。前者は理解状態と深い関係をもつが後者は理解状態とはあまり関係のない反応である。しかし両者に共通することは歴史事象を解釈する場合、媒介過程に自由、平等、戦争という価値的な意味がはたらい、歴史事象を歴史的存在として、時代の流れに位置づけ、史実に即して考える態度がまだまだできていない傾向を示している。Cのなんとなく、というばくぜんとした受けとめ方についても、自由民権運動は、なんとなくよい、という受けとめ方をしており、日露戦争はなんとなく悪いという受けとめ方の傾向を示し、これも前に述べた、自由、平等、戦争という概念が媒介して考える傾向を示しているといえる。また自由民権運動を否定しようとする見解や、戦争をしてでも積極的に発展したほうがよいという見解は両者ともに否定の反応が多いが、否定の強さが概念の性格によって異なり、その相関係数をみると 0.374 で必ずしも相関があるとはいえない。また上、中、下位群別に見ると下位群は、上中位群に比べて肯定、否定の強さが弱く平均値が中央による。このことは反応する場合、判断の基になる歴史事象に対する認識が浅く、事象の意味をとらえられないことや、文章に対する読解力、述べられた見解を弁別する能力などが影響しているといえる。全体としては、その概括的な原因、経過、影響について客観的に認め、さらに、自由民権運動については建設的に受けとめ、日露戦争については批判的に受けとめようとする傾向が認められ、社会的態度という面からみるなら好ましい反応を示しているといえる。反面、その時代の史実にそって批判することは容易でなく、史実に即さない美化した考えをもったり、道徳的な観点から強く否定する者もかなりあり、事象をその時代に位置づけて史実に即して考察しようとする歴史的な思考態度はまだ不じゅうぶんであるといえる。そして下位群ほど肯定や否定をする強さが弱く、あるときには賛成して、あるときには同じ内容を否定したりする非論理的な者や、認識の不じゅうぶんな者が存在している。また最も肯定された見解や否定された見解を検討すると学習指導におけるコミュニケーションの中で生徒の印象深く受けとめた表現が影響していることが認められ、具体的なエピソードを話すことの重要性を示している。したがって何を具体的な資料として提示し、説明するかという教材選択が、イメージや意見に影響を及ぼす重要な問題となってくるわけである。

5 結果の要約

歴史認識が深まるとは事象と事象を多面的に関係づけて、その歴史的意味をは握していくことにある。その認識の深まりを妨げている学習態度の問題点を把握すべく、事例的、予備的に行なった調査結果を考察してきた。以下にその結果を要約し、今後の研究の方向について述べたい。

(1) 概念形成過程において関係づけようとする歴史事象から見た思考の傾向

① 学習前において関係づけようとする事象とその理由から考察すると、既有知識（たとえば板垣退助や生活経験からの類推（たとえば運動と新聞）などの他に、ことばの意味を媒介にして、事象を結びつけようとする傾向がある。（たとえば、両方とも政治に関係するから）これは、やはりなんらかの既有知識がはたらいている面もあるが、一面、ある概念のわく（たとえば政治、自由）をもっていてそれに位置づけ、関係づけていこうとする思考傾向があるといえよう。

② 学習を通して関係づける生徒が多くなる事象は、概念に直接関係のある、表面にあらわれたらえやすい事象や、その事象を直接学習した時間内に提示された事象が多くなるのに対して、事象を解釈し意味づけるに必要な事象や、前に学習した内容で原因となっている事象を関係づけようとするものが少ない。これらは理解できなかったということだけでなく、その背後にある意識を面接や反応傾向から考察すると次のような思考的な態度がはたらいているといえよう。

ア、歴史学習に対する構えとして、いわゆる史実を要約し项目的な知識として記憶しておこうとする構え。

イ、歴史はいろいろな事象が複雑に網の目のように関係し合って発展してきているが、教科書の記述も指導計画も、それをそのままとらえることは不可能であるから、政治とか経済、文化などにまとめられる場合が多い。その場合、前に学習した事象を前の時代のように考えて、現在学習している事象に関係づけて考察しようとする意識が乏しい。

ウ、ア、イの結果として事象を多面的に関係づけ歴史の流れに位置づけて考察するのではなく、概念を一つ一つ切り離して项目的な知識の集合としてとらえようとする構えがあるといえよう。

③ 関係があると判断した理由から検討すると、だれが、なにをつくって、なにをしたという理由は正しく書く者が多いが、他の事象と関係づけて理由を書かなければならないときになると今日学んだから、なんとなくという理由になり、関係づけて説明しようとしないう。学習観察でも関係づけて説明しなければならぬときにあまり考えず「わかりません」と答えてしまう態度がある。

④ 上中下位群の面から検討すると、関係づけようとした事象は程度の差はあるけれども傾向はひとしい。しかし、下位群は関係のない事象でも連想的に、あるいは、なにかの印象に残っているもので関係づけようとする傾向がある。また、なんとなく、今日学んだから、という理由が下位群や中位群の一部に多い。面接や記述内容で検討すると、ことばとしては受け入れても意味をとらえられない。

したがって、事象相互の関係がとらえられず断片的な脈絡のない知識となる。また、学習に対する態度に考えようとする意欲が乏しく、ただばくぜんと教師の話の聞いている態度がある。いっせい指導の中で、彼等に意欲的に思考させる態度をつけるために、ただ説明を聞かせるだけでなく作業的な学習を取り入れる必要がある。

(2) イメージ調査を通してみられる思考や感じ方の傾向性

① (1)の①に述べた思考傾向と関連して、自由民権運動の場合は既有知識と概念を示すことばの

意味を媒介にして、学習前から美化した完全なものとしてとらえようとするステレオタイプがみられる。それに対して、日露戦争の場合は戦争という意味が媒介にはたらし全体としては批判的、否定的傾向であるが、評価の側面に関しては勝利の結果から肯定的にみようとする者と、被害の面から否定的にみようとする者の両者があり、反応の方向は自由民権運動ほど共通の傾向をもたない。

- ② 両者に関係していることは(1)の②に述べた、事象を広く関係づけ、時代の流れに位置づけてとらえようとしない思考傾向が、学習前のステレオタイプを修正できず、事象に対する感じ方を浅いものにして、戦争の原因を単純だと割り切ったり、自由民権運動を絶対視してとらえようとする結果をもたらしているといえよう。
- ③ 学校放送のような視聴覚教材は生徒のイメージ形成には非常に効果的である。しかし、ドラマふうに構成されていたり、史実のある面を強調することになるから、ともすると生徒のもつステレオタイプをますます強調する結果を生むこともありうる。補充する教材や説明に配慮が必要である。
- ④ また指導における教師の提示する資料や説明が、具体的で情報量が大きい場合や情緒的に訴える場合、それが生徒のもつ興味、関心、価値意識に合うときには、生徒のその事象に対する考え方や感じ方に大きな影響を与えている。
- ⑤ 上、中、下位群と比較検討すると、特に下位群は既有知識の少ないことや理解力の劣っていることと関連して、情報を受け入れ、イメージを形成する感じ方がにぶい。それに対し上位群は、既有知識や連想などにより史実に即さない先走った判断をする危険性があるといえよう。

(3) 学習後における意見調査を通してみられる歴史事象の受けとめ方、見方の傾向

- ① 自由民権運動については肯定的建設的な見解に対する反応が強いし、日露戦争については批判的否定的な見解に対する反応が強く、戦争とか政治に対する社会的態度の形成という面では好ましい反応傾向を示しているといえる。
- ② しかし、現在の立場からそれを批判する見解には強く反応しても、その時代の史実に基づいて批判するということは容易でない傾向がみられる。
- ③ また、自由平等ということで史実に即さない美化した見解を肯定したり、戦争ということで歴史事象を強く道徳的に否定する見解を肯定する者が多い。前者は学習における認識の浅いことと、自由平等の実現への努力ということに対する価値意識による反応傾向であり、後者は日露戦争への理解程度(上、中、下位群の)と関係なく、現在の戦争に対する道徳的意識が歴史事象に強く反映した反応である。
- ④ 生徒が強く肯定したり、否定した見解をみると、イメージ形成に影響を及ぼしたコミュニケーションが歴史事象の受けとめ方、見方にも影響を及ぼしていることが認められる。
- ⑤ 上、中、下位群に分けて検討すると、下位群は歴史事象に対する認識の浅いことや弁別力の劣ることと相まって、肯定、否定の態度が明確でなかったり、一貫した反応をしていない。

む す び

この研究の最初に述べたごとく、認知過程は省略——補足——構成の過程が考えられ、この過程における主体のはたらしの根底に態度がはたらし、経験の意味を決定することを述べた。ニューカムは、このような経験の意味を決定するはたらしを準拠わく＝関係づけの枠(Frame of reference) (16)

とよび、どんな事物、事象、状況でも必ず「あるもの」との関係において判断され、そのあるものとして、先入観、ステレオタイプ、偏見、価値意識、集団規範などをあげ、態度の変容は準拠わくの変容がなければ変化しないと述べている⁽¹⁷⁾、このような観点から考えると、自由、平等の実現への努力とか戦争という社会事象に対する態度が、自由民権運動や日露戦争などの歴史事象を学習する態度にも影響しているといつてよい。そして、学習を通して、それに関係づけられる事象を印象強く受けとめ、一面では戦争とか議会政治に対する社会的態度として好ましい反応傾向を示している。しかし、この傾向は反面に歴史事象を客観的に因果の連鎖の中に位置づけて史実に即して考える態度が乏しいことと相まって、史実に即さない美化したイメージをもったり、歴史事象を道徳的観点から考えようとする傾向をもたらしているといえよう。また、イメージ調査や意見調査に見られたコミュニケーションの影響もこれと深い関係をもっているといえる。

言語心理学では、外からのことばによる刺激が個人や集団のいだいている価値や興味に関する場合には受け手の事象に対する態度を大きく変える⁽¹⁸⁾といわれているが、このような傾向がこの研究でもあらわれている。

また、歴史学習に対する構えという観点でみると、その概念に直接関係し、表面的にとらえやすい事象を項目的にとらえ記憶しておこうとする意識があり、事象を多面的に関係づけ歴史の流れに位置づけて考察しようとする構えが乏しい傾向が見られる。したがって、一面ではある事象を強く銘記するが、一面では前に学習した歴史事象を広く関係づけて考察することができない傾向を示している。

しかし、以上のことは、2学級でしかも短期間の観察、面接、調査によるものであるから、もちろん一般化したものとはいえない。今後学習態度の研究を進める上での問題点としての仮説といったほうがよいであろう。そして、歴史認識を深める学習態度の形成という問題意識からは、事象を多面的に関係づけ因果の連鎖の中に位置づけて考察しようとする態度の形成が非常に重要であると考えられる。このような態度が形成され歴史に対する見方が深まることによって、社会事象に対する社会的態度も、型にはまった考え方や単純な考え方から脱して、より深い歴史的な自覚に立った態度が形成されるのではないかと考える。このような点から次年度は、学習態度をさらに理論的に分析するとともに、上記の点についての児童生徒の様態を長期間にわたり継続的に調査、観察し、態度形成と学習指導との関係を追求していきたい。

あ と が き

この研究にあたって、研究授業を担当して下さった下記の先生、ならびにご協力をいただいた校長先生、教職員各位に対し心から感謝の意を表します。

新潟市立東新中学校 藤井昭三先生

この研究を担当し、執筆した者は 大久保正司 である。

参 考 文 献

- 注 (1) 相良守次編 現代心理学の諸学説 岩波書店 P.233
 〃 島田 一男 社会心理学の基礎—態度の心理学 大日本図書 P. 23
 (2) 橋本 重治 教育評価総説 金子書房 P.345
 (3) 講座 社会学 第三卷 社会と文化 東大出版会 P.132
 (4) ニューカム 社会心理学 培風館 P. 86
 (5) オルポート 偏見の心理 上 培風館 P.145
 (6) 滝上 考 社会科の学習心理 金子書房 P. 6
 (7) ロバート・トムソン 思考心理学 誠信書房 P.157-169
 (8) 鮎戸 弘 S. D法とイメージ測定 市場調査90, 91号 興論科学協会発行
 (9) 同 上
 (10) 日本語版標準因子, 尺度の考察 同 上
 (11) オルポート 偏見の心理 上 培風館 P. 17
 (12) 滝沢 武久 子どものものの考え方 岩波書店 P.189
 (13) 中野 佐三 問題解決の心理 牧書店 P.165
 小口 忠彦
 (14) 久坂 三郎 歴史認識, 態度, 能力を培うこと 社会科教育 1965年1月 明治図書
 (15) 橋本 重治 教育評価総説 金子書房 P.245
 (16) ニューカム 社会心理学 培風館 P.216
 (17) 同 上
 (18) 入谷 敏夫 言語心理学 誠信書房 P.242